

フィリピン研修派遣実施報告書 (2019 年度)

京都大学アジア研究教育ユニット 報告書
Kyoto University Asian Studies Unit Project Report

安里和晃 (文学研究科准教授)
本間桃里 (人間・環境学研究科大学院生)



はじめに

フィリピン研修は、3本柱からなっている。ひとつは、京都市内の小中学校で学習支援のボランティアに参加することである。少なくとも一学期間、市内の小中学校に週に1回赴いて、児童・生徒に対する学習支援を通じて「多文化」を体験する。もうひとつは、授業の受講だ。そこでは、移民の学習支援を取り巻くグローバルな社会的背景を学ぶ。そして最後が、実際にフィリピンに行って、なぜ人々は移動するのかについて現場で学ぶことだ。参加者はそこで国籍、近代家族、貧困、ジェンダー、歴史、「南北問題」などさまざまな事象を目の当たりにする。学習支援と授業という基礎のうえに実施するフィリピン訪問は、学生にとって多くを体験として学べる最良の機会である。

なぜ、学習支援はボランティア（無償労働）なのか。これに従事させる意義はなにか。理由はいくつもあるが、第1に、日本語指導が必要な児童生徒と触れ合うことで、多文化を体感し自分の言葉で表現できるようになる。「多文化共生」は、まだ確立していない。しかし、具体的にかかわることで、その厳しい現実に触れて自らの言葉で多文化を表現できるようになる。多文化の現実にかかわること、それこそが学習支援の目的だ。

第2は、コミュニティ活動の今日的意義を検討することだ。学習支援は、コミュニティ活動の一環である。そしてコミュニティ活動は多くの場合、無償労働だ。その無償性は、政治的に利用されがちという課題がある。他方で、福祉の縮減、支援を必要とする人々の増大、人々のQOLを高める意味において、相互扶助的なコミュニティ活動は必要不可欠である。本来なら、コミュニティ活動の意義が理解され社会的承認があつてこそ、コミュニティ活動は報いられるが、ボトムアップの実践が先行し、その意義は十分理解されていない。京都大学の学生は多くが中央志向だが、学生の中にコミュニティ活動に従事する意義は大きい。

第3は、移民の子をめぐる社会的・政治的背景の理解を深めることだ。移民の子どもの問題を個人的な問題とする解釈も多いが、それは誤りである。恋愛、結婚、離婚、無国籍、ひとり親、失業、貧困、いじめなど、移民の子が抱える厳しい現実を鑑みれば、個人的な営みというよりも、社会的、制度的かつ政治的な問題なのだ。政府は「日本は移民国家ではない」と連呼しているが、これがいかに移民の人々の存在を不可視化していることか。

フィリピン系移民に向き合うことは、植民地支配、第二次世界大戦、マニラ市街戦、キリノ大統領家族殺害と国交の回復などの日比の歴史と向き合うことだ。それに、エンターテイナーの問題を直視することでもある。いまだに多くの女性たちが、パブで働こうと日本を目指している。性愛一致の近代家族や、日比の経済関係など、さまざまな現実とも向き合わなければならない。そうした歴史を背負うこの研修は、学部学生には重たいかもしれない。それでも、これまでの参加者は問題を言語化し、意見を報告書としてまとめてくれた。

ボランティア活動は、まだ日本では確立していない。大学からも企業からもほとんど評価されない、孤立した無償労働だ。しかし、それでもこの活動は、学生にとって大いなる意義があると確信している。なによりこうした活動は、児童生徒にとって大切だ。そんな状況下にあつて、受け入れの小中学校の先生方、そしてアジア研究教育ユニットは、本活動に惜しみない支援をしてくださっている。多文化にかかわる私たちを代表して、心より感謝を申し上げる。

安里和晃

目次

| | |
|---------------------|----|
| フィリピン研修の参加目的..... | 1 |
| スケジュール..... | 10 |
| 日誌 | |
| 到着日:8月25日(日) | 12 |
| 1日目:8月26日(月) | 13 |
| 2日目:8月27日(火) | 27 |
| 3日目:8月28日(水) | 39 |
| 4日目:8月29日(木) | 49 |
| 5日目:8月30日(金) | 55 |
| 6日目:8月31日(土) | 64 |
| 7日目:9月1日(日) | 76 |
| フィリピン研修を振り返って | 77 |
| 編集後記 | 90 |

フィリピン研修の参加目的

【文学部メディア文化学専修4年 飯塚彩】

私は以前、外国にルーツを持つ人々や移民に対してなんとなく“冷めた”視線、「大変だろうけど仕方ないよね」というような視線を送っていたように思います。低賃金労働、売春、言語の壁といった問題は、言葉では認識し理解していました。しかし実際に私の目に入るのは、百万遍の薬局で手際良く仕事をする中国人女性、六本木ヒルズのマクドナルドのアルバイトの多くを占めオペレーションを担う東南アジア系の人々などであり、彼らの抱える問題を肌で感じることはありませんでした。「現代の移民や外国人労働者といったテーマは、私のキャリアや日本にとって重要なテーマなのに、何にも知らないな」、このような動機でこの度の社会学特殊講義を受講しました。

そして、今年の5月から参加した春日丘中学校の日本語教室のボランティアや、授業で先生や院生から様々なお話を近い距離で聞くことを通し、現地フィリピンでの研修に参加したい思いが具体的かつ強固になりました。5,6月というまだ短い期間ではありますが、人懐っこく素直に気持ちを表現する生徒たちは一緒にいて楽しいと率直に思い、同時に、私の無知さから来る些細な言葉や態度が彼らにとってどのように棘となるのかがわからないことに悩みました。また、口は達者でも文章を読み書きすると途端に止まってしまう生徒を見たり、授業では先生の知り合いのフィリピン人に関する生々しいトラブルや悩みを聞いたりする中で、私が百万遍や六本木で見たものは一部の人のほんの一面に過ぎないことがわかりました。

私は、1週間のフィリピン研修を通し、まずそもそもなぜ彼らは外国に出なければいけないのか、外国に出るにあたっての準備と不安はどのようなものか、ということを生活者視点と制度視点の両方から学びたいです。次に、そのような状況の背景として、送り出し国フィリピンと受け入れ国日本にそれぞれどのような課題があるのかを観察し、プレゼンなどを通し少しでも状況を改善するための力になります。そして、包括的な支援施策で対応するケースと、プライベートで内面的な事情に合わせた個別対応のケースの線引きはどうあるべきかということ、帰国後まで深く考えたいです。

最終的には、今後のボランティア活動に活かせるような、ひいては(現状ではおそらく彼らを動かす側になるであろう)私のキャリアにおいて両国の労働者・生活者に寄与できるような学びを得たいと思っています。

【文学部社会学専修4年 今岡哲哉】

本研修を志望した理由は三つある。まず、京都市内でフィリピン系児童への学習支援を行ってから、彼らがルーツを持つフィリピンという国自体に関心を持つようになったことがある。私は人生で東南アジアに行ったことが一度もないので、是非この機会を生かしてフィリピンという国を肌で感じたい。加えて、私の知人がフィリピン大学に留学していたり、知っている開発援助機関の職員の方がマニラに住んでいたこともあったので、フィリピンを純粹に訪れてみたい心情がある。

次に、フィリピン研修を通じて、自らの研究に関連する知識を深めたいからである。私は現在、埼玉県公営団地における、中国人の集住化と日本人との共生をテーマにした卒業研究に取り組んでいる。また、卒業後は移民研究を主眼においた大学院への進学を希望している。こうした背景を踏まえると、フィリピン研修で移民に関わる組織・人々と接することができるのは、私の研究上で大きな財産となるはずである。特に、私のような学部生には、移民個人や移民団体に接することができても、政府の移民送出機関と接する機会を自力で得ることは不可能に近いので、フィリピン研修の持つ意義は大きいと考えられる。

最後に、フィリピン研修を通じて、社会学に関心を持つ他の学生と知り合う機会を得たいからである。社会学専修では、東アジアジュニアワークショップを除けば、学生の間で上下あるいは横の関わりを持つ機会が限られている。それゆえ、フィリピン研修で他の学生と一週間を共にすることで、学習意欲の高い学生と知己を得ることを目指したい。

【文学部社会学専修3年 金城琴音】

私がこのプログラムに参加したい理由は、フィリピンの社会について深く知りたいと思ったからです。2年生の後期の授業で、安里和晃先生の社会学特殊講義を受け、日本に住む移民が様々な問題を抱えていると分かり、自分にも何か出来ることはないかと考えるようになりました。そのような中、文学部の落合恵美子先生に授業の中でこちらのフィリピン研修を勧められ、さらに安里先生にボランティアをしてみないかとお誘いをいただき、まずはフィリピン人の親を持つ子どもたちの学習支援ボランティアを行うことになりました。子どもたちは皆素直で、勉強に対してもとても熱心で、自分が少しでも力になればと思い毎週ボランティア活動に参加するようになりました。活動を通してフィリピンについて興味が湧き、実際に現地に行ってフィリピンの文化や教育、そして社会全体について少しでもたくさん知りたいと思うようになり、今回応募に至りました。日本とは異なる部分も多くあり、フィリピンが抱える問題点や魅力が分かるだけでなく、逆に普段は気がつかないような日本についての発見もあるのではないかと思います。私は今まで日本を出たことがなく、自分自身の価値観や視野が狭いと感じています。本を読んだり、勉強したりして独自に視野を広げる努力はしていますが、もしもフィリピン研修に参加できたら、自分だけでは経験不可能なことを現地で体感でき、自分自身の成長にも繋がると考えています。私は英語のリスニングやスピーキングがあまり得意ではありませんが、リスニングに関しては毎日洋画を見たり英語のニュースを聞いたりし、スピーキングに関してはオンラインで英会話を習うなどして、英語力の向上に努めています。

フィリピン研修は、私が一回生の頃からずっと参加したいと思っていたプログラムでした。これまでサークルの都合で参加できず、大学4年間で参加することを諦めていた部分もありましたが、今回もし参加することができたら、誰よりも一生懸命に活動に取り組んでいきたいと思っています。英語の勉強はもちろん、移民問題に関する知識を増やしたり、引き続き毎回の目標を持って学習ボランティアに参加したりといった事前準備を怠らず、実際に現地に行くことができれば英語の報告やディスカッションなどに全力に取り組み、生徒・児童や幹旋業者、JFCの方々などと自分から積極的に交流できるようにすることが目標です。

【文学研究科社会学専修 修士1年 中原慧】

今回、2019年度フィリピン派遣に応募した背景として、今学期の授業の一環として京都市立春日丘中学校でのボランティア活動がある。その活動を通じて接している Japanese-Filipino-Children (JFC) の母親たちが生まれ育ったフィリピンが、どのような国であるかということに興味を抱いた。特に、JFC の母親たちや JFC へのまなざしは、日本にいと体感できないものであり、また、それらの理解なくしては JFC の問題を理解することもできないと感じている。加えて、彼ら JFC を含めた途上国から「デカセギ」としてやってくる労働者の母国を知ることは、今後増加が予想されている外国人労働者や永住者との社会の構築を見据える上で不可欠なものであるといえる。

今回の派遣を通じて、フィリピンの学校のみならず、政府機関や NGO などを訪問することになっており、1つの問題をより多様な主体から理解することが出来ると期待している。一つの主体からの視点ではなく、多くの視点から見ることで、JFC が再度日本に来ることの持つ意味や受け取り方など、多面的に問題を把握することが出来る。

また、日程の中にはフィリピン政府の機関の方へのプレゼンテーションの機会も用意されており、そのような場を通じて、自分が短期間であるが感じている日本における JFC が接する課題などを伝えることが出来るようにしたい。日本において発生している課題やその背景としての教育などの制度を説明することで、今後來日するであろうフィリピン人の方々へのサポートなることも期待している。

今回の派遣では、多くのことを学ぶことになると思うが、上述の政府機関へのプレゼンテーションのように、出来る限り日本からの情報発信という形でフィリピンへの貢献をしていきたいとも考えている。ただ情報を得ることにならずに、自分が持っている情報などを利用してもらえるように積極的に関わっていきたい。

さらに、これまで英語を通じて関わってきた人々は比較的発展した国出身であり、異なる背景も持つ人と交流し、環境を知ること、より自分がいる環境や持っている情報や能力などがどのように世界と繋がっているかを再認識する機会としたい。

【人間・環境学研究科 共生人間学専攻(教育社会学) 修士2年 本間桃里】

申請者がフィリピン研修にぜひ参加したく思う理由は主に4つある。

第1に、フィリピン研修での経験が研究にプラスになると確信しているためである。申請者は2018年のフィリピン研修に参加した。研修では移民、そしてかれらを取り巻く多様なアクターと関わりを持つことができ、これまで知り得なかったリアリティとその背後にある社会構造について多くの学びを得た。研修をきっかけに移民研究への関心がますます高まり、現在もフィリピンからの移民に着目した研究を行っている。具体的には、「日本に住むフィリピン系ニューカマーの子どもにとっての学校を通じた生活保障」をテーマに小学校の日本語教室で学習支援をしつつ、母親や学校関係者等にインタビューを行っている。そして研究を進める中で、多くの疑問が新たに湧いてきた。例えば、フィリピンの学校は人々の日常生活にどの程度関わるのか、各アクター(政府、幹旋企業、NGO、福祉専門家など)が移民の生活保障にどのような機能を担っているのか、フィリピンと日本で健康観や子育て観、家族観にどのような差異があるか、人種やジェンダーがどのように交差し移民の生活に影響しているか、などである。フィリピン研修を通して、これらを含む問いに対する知見を得たく思う。また、博士後期課程では日本だけでなくフィリピンの学校をフィールドにした研究も視野に入れているため、研修を通して様々な人とのつながりを持ちたいと考えている。自身の力では会えない異なる立場の人々のお話を伺えることがプログラムの大きな魅力の一つである。

第2に、日本に住むフィリピン母子が抱える課題を知っている以上、それに対して何かしらのアクションを取りたいと考えるためである。フィリピン研修では、フィリピン政府在外フィリピン人委員会でのインターンシップを通して、政府側や移民女性たちと課題を話し合うことができる。学生だからこそ、日本で子どもたちや母親と関わっているからこそ、分かることをお話することで、多様な人々が生きやすい社会環境づくりに少しでも貢献できればと思う。フィリピンと日本の架け橋になれる、とても貴重な機会である。

第3に、フィリピンについての理解を深めるためである。フィリピンの歴史や文化について勉強中であるが、本や論文を読むだけでは物足りなく感じてしまう。実際に足を運び、その場の空気を感じ、現地の人と直接関わることで、歴史も文化も自らの実体験として吸収できる。例えば去年マラカニアン宮殿を訪れたとき、フィリピンと日本の生々しい戦争の記憶を、その場にたまたま居合わせた人々と共有することができた。これはその場の独特の空気感の中にいなければできなかった体験である。単に頭の中で知識を蓄積していくのではなく、心と身体を存分に使って、フィリピンについて知りたいと思う。

最後に、安里先生や他の学生たちと感じたことを意見交換できるためである。去年、言葉に表しにくいようなモヤモヤした気持ちをみんなとすぐに話し合うことができ、自

分の気持ちを整理するのにとても助かった。単独では整理しきれなかったと思うので、グループで行く機会があることは大変有り難い。同じ場においても他の学生が違う視点を持っていたこともあり、興味深かった。

以上の理由から、今年もフィリピン研修の参加を志望する。

【文学部心理学専修4年 松岡萌映】

春日丘中学校に学習支援ボランティアに行く度に、様々なことを考えさせられます。ボランティアを通してひしひしと感じるのは、「環境」の影響の大きさです。私が通っていた小学校は半分以上の生徒が中学受験をするような教育熱心な学校でした。私も周りにつられて小学六年生から塾に通い、受験をして国立の中高一貫校に通いました。高校生になると当然のように勉強して大学を受験しました。教育熱心な地域に育ち、中学受験をして、ある程度「勉強のできる」生徒しかいない学校で過ごした私にとっては、春日丘中学校のような普通の公立中学校でさえ自分が過ごしてきた環境とは異なるものでした。何度かボランティアに通ううちに、様々な問題が見えてきました。特に中学3年生は高校受験が迫っており、会話の中にも「〇〇高校を目指したいんだけど…」といったものが聞こえます。しかし、その「目指したい」と彼らの現状には乖離があるように感じます。そんな会話を聞いていると、どうしても「この子供たちはこれからどんなふう生きていくのだろう」と考えてしまいます。私が中学3年生のときは、高校に進んで、次は大学に進むのだろうと当然のように考えていました。しかし、JFC の子どもたちの大学進学率は高くありません。JFC の子どもたちにとっては、私にとっては当たり前であった大学進学という選択肢は当たり前のものではないのでしょうか。私なら環境に流されてなんとなく生きていても大学生になれたけれども、この子供達の場合はそうもいかないのではないかと考えてしまいます。もちろん大学に行くことが正しいとも限りませんが、選択肢があるのとないのとではずいぶん差があります。また、私の場合は親が気にかけてくれますが、母親がフィリピン人で日本の教育制度に詳しくない場合は、自分で考えなくては誰も助けてくれないかもしれません。

JFC の子どもたちは果たして日本に来て正解だったのでしょうか。フィリピン人の母親の中には、日本での生活は裕福とはいえなくても、フィリピンでの暮らしよりはよいという人もいます。しかし、子どもたちの人生を考えたときに、日本で生活することが最適なのかどうか私にはわかりませんでした。慣れ親しみ言葉が通じるフィリピンで暮らすというメリットもあるかもしれません。そう考えるうちに、母親たちが経験したフィリピンの生活とは一体どんなものだったのか、なぜ母親たちは日本で育児をすることを決めたのか、子どもたちがそのままフィリピンで成長していたらどうなっていたのか、などを実際に現地に行って考えることには意味があると思いました。本フィリピン研修は、ボランティアを通して出てきた疑問に対してより深く考える機会にしたいと思います。

【文学研究科社会学専修 修士1年 山淵あいら】

フィリピン研修は2回目の参加となる。再び研修に参加したいと思う理由と研修にあたっての抱負を述べたい。

2年半前の学部2回生の冬、最初のフィリピン研修に参加し、想像を絶するほどの刺激的な経験と学びと得ることができた。研修前の約1年間、授業やその一環であるボランティア活動を通して、人の移動をめぐる日比関係の歴史や人口の国際移動についての社会学的理論、日比混血児(JFC)の抱える課題や国籍や認知における法制度の変遷など、積極的に学習した。しかし、フィリピン研修で現地の様々な場所を実際に訪問して「現場」を目にしたり、国際移動する人々や、かれらを取りまく様々な団体・個人から生の声をきいた私は、ほとんど何も分かっていなかったことを認めざるを得ないような衝撃を受けたことを今でも覚えている。実際、今考えれば恥ずかしいほど、私は何も知らなかったのだと思う。日本では外国人労働者の家族滞納が限られた人しか許されず、フィリピン人の多くは子どもを残して国を越えなければならないこと、日本人父親に拒絶された子どもたちや偽装結婚や人身売買が疑われる渡日予定の女性たちの存在、エンターテイナー・オーディションの会場は、興行ビザが厳格化された現在でもなお、日本で働く機会を求めて100人を超える女性たちですし詰め状態であること。フィリピンが労働力送り出し国であること。「知識」として分かっていることであっても、本当の意味で「理解」できていることは少ない。実際に自分の足でその場におもむき、自分の目で見て、当事者の語りを聞いて初めて分かることがあまりにも多いということに気づかされた。ここで得た、日比社会の現実や無知な自分自身への嫌悪感と焦燥感が、その後の研究へのモチベーションとなった。

この経験を踏まえ、私は現在までJFCに関する研究と当事者らとの交流を継続して行ってきた。具体的には日本で就労するJFCの母親らへのインタビューや、移民の子どもの教育に関する研究会へ参加・企画、来日したJFCへの学習支援などである。実際に日本に働きに来た人々と交わり、移住した子どもたちとの関係性を構築していく過程で、彼女たちは決して輸出された「労働力」なのではなく、日本で働くという決断をして来日した主体的な存在であり、日本で暮らす生活者なのだということをありきたりではあるが強く感じるようになった。またJFCにたいする週2回の学習支援もボランティアあるいは参与観察として継続している。他にもフィリピンから来日したフィリピン人労働者やJFCたちとかかわる機会も少なく無かったが、中でも印象的だったのが、日本人父との初めての面会のために来日したJFC女性と出会いである。彼女の語りや自己認識のあり様から、在比JFCたちがもつ日本人父への意識、「父親性」、あるいはその形成課程に見られる社会性のようなものに興味をもつようになった。NPOなどに参加するJFCたちが、そこで語られるマスター・ナラティブやドミナント・ストーリーのようなものをどう受け止めているのか、またどのような語られ方がなされている

のか。そういった点を、今回のフィリピン研修で観察・聞き取りすることが出来ればと思っています。

また、これまで日本やフィリピンで出会った、フィリピンに住む人々との再会も、個人的なものではあるが私にとっては非常に重要な、研修に参加する目的のひとつでもある。私がこの分野の研究において大事にしていることのひとつは、長期的に関係を維持することである。これは、研修の引率教員である安里先生の姿から学んだことでもある。研究対象としてその場限りの関係で終わらせてしまうのではなく、長くかかわって信頼関係を築くことで、よりよく理解できるようになることもあるだろうし、そうやって初めて引き出せる語りもあるだろう。会いに行きたい人たちが、2年半前のフィリピン研修やその後の活動のなかでたくさんできた。かれらと再会し、フィリピン社会について、あるいはかれらのライフストーリーについて、たくさんのお話を伺うことも、今回のフィリピン研修の目標でもある。今回のフィリピン研修でも、これからの研究に生かすことのできる学習や経験をしてきたい。また、研究目的意識を持つことで、前回よりも能動的・積極的な姿勢で参加し、より収穫の多い研修にすることができるだろうと思っている。

以上が、フィリピン研修への抱負である。

スケジュール

到着日: 8月25日 (日)

- 17:10 マニラ空港着
- 17:40 マニラ空港発
- 18:10 HOTEL BENILDE着
- 18:30 ホテルで夕食
- 21:15 ハナさんへのインタビュー [ハナさん]

1日目: 8月26日 (月)

- 10:15 HOTEL BENILDE出発
- 11:45 マニラ大聖堂
- 12:30 Barbara's Heritage Restaurantにて昼食
- 13:45 Intramuros視察 [観光庁ガイド: Jaybeさん]
- 15:40 マニラホテル到着、軽食、館内見学
- 18:30 HOTEL BENILDE到着
- 20:30 HOTEL BENILDE出発
- 21:00 パブで働く女性たちへのインタビュー
- 23:15 HOTEL BENILDE 到着

2日目: 8月27日 (火)

- 09:30 HOTEL BENILDE出発
- 09:45 CFO到着
- 10:20 CFOについてのレクチャー、施設見学 [CFO: ポールさん]
- 12:15 CFOにて昼食
- 13:20 Anti-traffickingについてのレクチャー [CFO: ジョンさん]
- 14:30 日本への結婚移民の方へのインタビュー、学生のプレゼン
- 16:20 国立自然史博物館
- 17:20 Robinsons Placeにて買い物
- 19:00 Ping Yang Hot Potにて夕食 [ノブヨさん、チエさん]
- 21:20 HOTEL BENILDE 到着

3日目: 8月28日 (水)

- 11:00 HOTEL BENILDE 出発
- 13:00 Personal Ability Development 財団 [石川さん]
(近くの飲茶店にて昼食)
- 17:45 CFO職員に対する学生のプレゼン
- 19:20 CFOにて夕食
- 20:30 HOTEL BENILDE到着

4日目: 8月29日 (木)

- 07:00 HOTEL BENILDE 出発
- 08:00 POEAにてレクチャー、見学 [POEA: Abigail M Calinisanさん]
- 11:15 在フィリピン日本国大使館 [厚労省国際課: 安川さん]
- 13:00 Chow Kingにて昼食
- 14:20 CFOにて休憩
- 16:00 Philippine Normal University [Carloさん]
- 18:00 Robinsonsにて夕食
- 20:10 HOTEL BENILDE 到着

5日目: 8月30日 (金)

- 08:40 HOTEL BENILDE 出発
- 09:05 Malacanang Palace [ガイド: Ruiさん]
- 12:10 Batis Center for Women [アオイさん、Roseさん、Karisさん]
- 15:40 カフェテリアにて休憩
- 17:10 University of Philippines Diliman [Jocelyn 先生]
- 21:40 HOTEL BENILDE 到着

6日目: 8月31日 (土)

- 04:15 HOTEL BENILDE 出発
- 06:15 GK Enchanted Farmにて農業体験、朝食、見学 [Jojoさん、ひなのさん]
- 14:30 DAWN [メルさん]
- 18:00 Robinsonsにて夕食
- 20:40 HOTEL BENILDE到着
- 21:15 ミーティング

帰国日: 9月1日 (日)

- 05:20 HOTEL BENILDE 出発
- 07:25 マニラ空港発
- 12:20 関西国際空港到着、解散

到着日：2019年8月25日（日）

*ハナさん 【執筆者：飯塚彩】

父親が日本人でフィリピン在住、二重国籍を取得しているハナさん(仮名)が私達のホテルまで来てくださった。日本にいる父親に会いたいという気持ちを強く持っており、安里先生や本研修のメンバー、NGOなどの力を借りて日本で面会を二回果たしたようだ。先生やメンバーと再会した際、とても盛り上がっていて、明るくてチャーミングな女性だと感じた。

私達の中には初めて会う人とそうでない人がいたため彼女にとっては繰り返しの話もあったかもしれないが、来日したときについてのことや、仕事のことなどを丁寧に話してくれた。前回日本に渡った際に父親の家に滞在できると思っていたのに現地で断られ突き落とされた気持ちになったこと、日本での家庭の子どもとは一緒に暮らしていないと嘘をつかれていたこと、先月誕生日のお祝いラインをしたが既読がつかないことなど、私が今まで経験したことのない理不尽が彼女にはたくさん起こっていること、しかし彼との写真を大事に持ち慕い続けていることなどを知り辛くなった。私は、やむを得ない理由があったにせよ「自分と母親を捨てた存在」を父親として慕えることが初め理解できなかった。しかし彼女の話聞く中で、家族を大切にすることがフィリピンの国民性として特徴的で、学校の授業などでも皆が自分の家族について発信する機会が定期的に設けられていることがわかり、彼女の父親への認識はとても根強いものなのだと知った。



また、彼女は現在フィリピンのIT企業に勤務している。日本の企業を受けたこともあり内定は得られなかったが、彼女がそうであったように、日本へ働きに出ようとする若者がフィリピンには多い。しかし彼らに対して職業斡旋を行うNGOには悪徳なものも多く、3D（DIRTY, DIFFICULT, DANGEROUS）と呼ばれるような労働を強いられるケースもあること（実際に彼女の友達が就職した日本のホテルがそのような職場だったためフィリピンに戻ってきたという）、そしてそのようなNGOを個人が見分けることはかなり難しいことを嘆いていた。

ハナさんには女子部屋に1泊してもらい、翌日は夕方まで一緒に視察をした。

(写真：ホテルのフロントにて)

1日目：2019年8月26日（月）

*Intramuros 視察 【報告者：金城琴音】

私たちは前日の夜から来ていただいたハナさんと共に 10:15 にホテルを出発し、マニラにある Intramuros へと向かった。Intramuros とは、高い壁と塀で囲まれた要塞であり、16 世紀にスペイン人によって建てられた。フィリピンの歴史や文化を知るのに非常に重要な地区である。11:00 に Intramuros の視察が開始される予定だったが、14:00 からに変更になったため、Intramuros 内のお店で Halo-halo を食べた。



(写真：具だくさんの Halo-Halo を満喫)

その後 11:45 ごろ、徒歩にてマニラ大聖堂を訪れた。この大聖堂は、Intramuros のシンボリック的存在となっているカトリック教会の大聖堂で、ドーム状の屋根とベル・タワーが遠くからでも見えるほど大きい。スペイン統治時代の 1571 年に建設されたが、第二次世界大戦で破壊。その後 1954 年から 1958 年に再建された。当時の神奈川県知事からの援助があったと言われる。また、4500 本のパイプを持つオルガンがあり、これはアジア最大級である。他の日本人観光客も少し見られ、教会内にあるフィリピン人アーティストがデザインした美しいステンドグラスに感動している様子だった。



(写真：マニラ大聖堂)

12:00 ごろからマニラ大聖堂前でカレッサ(馬車)に乗り、Intramuros 内を散策した。カレッサに乗りながら、現地男性が目についた建物について説明してくれた。教会や博物館、学校など Intramuros 内には多くの建物が存在していた。とくにマニラ私立大学やフィリピンリュケイオン大学など、Intramuros は高等教育機関の拠点として機能していることがわかった。途中でカレッサを降り、Galleria de los Presidentes de la Republica Filipina という、フィリピンの歴代大統領の石像がある場所で写真を撮ったりもした。カレッサの現地男性によると、今のフィリピン大統領は国民からかなり支持を得ているらしい。



(写真：カレッサ)

30分ほどのカレッサでの視察を終え、12:30 ごろに San Agustin 教会の隣にある Barbara's Heritage Restaurant にてランチbuffeを食べた。並んでいた料理はフィリピン風スペイン料理といった感じのものが多く、美味しかった。店内にはギターと歌の生演奏をしてくれる男性3人組がおり、日本の曲やバースデーソングを歌ってくれた。日本の曲を知っているのは、日本で働いた経験があるためだそうだった。



(写真：生演奏を聴きながらビュッフェで食事)

そして 13:45 から、観光庁ガイドの Jaybe さんと共に予定されていた Intramuros 視察を行なった。初めに RELIVING INTRAMUROS という看板が掲げられた小さなシアタールームで、Intramuros の歴史の流れを説明するビデオを見せてもらった。Intramuros は 16 世紀にスペイン人たちによって建てられたマニラの最古の地区であり、パシッグ川南岸に位置する。その名称は直訳するとスペイン語で「壁の内側で」となり、壁で囲まれた都市または要塞を意味するほか、その厚く高い壁と堀とで囲まれた構造を言い表している。スペイン時代には、Intramuros はマニラそのものだと考えられていた。元々、Intramuros のあった場所はマレー系イスラム教徒が生活していた場所であった。そこへスペイン人が来てこの地を占領し、初代総督が Intramuros を作らせた。Intramuros が完成したのは 1606 年であり、スペイン人の中心地として機能した。Intramuros の中にはローマ・カトリックの教会がいくつかあり、他にも教会が運営している学校がある。また、かつては総督の宮殿も Intramuros にあった。当時はスペイン人とメスティーソのみが城塞都市に居住することが許されていた。キリスト教徒である先住民や中国人も中に入ることはできたが、住むことは妨げられていた。そのため、先住民の大部分と中国人は城壁の外で暮らしていた。第二次世界大戦が起きると日本軍がフィリピンを占領し、その後アメリカがフィリピンを奪還するために反抗をスタートした。この時に起きたの

がマニラでの戦いであった。多数の市民を巻き込み、10万人もの人々が命を落としたとされている。アメリカ軍によって市街地は灰燼となり、Intramuros にあった建物の大部分は失われてしまった。唯一無事だったものは San Agustin 教会だけであり、残されていた建物も大部分は戦後に取り壊された。Intramuros にはこのような歴史があるが、1980年代になると街の復旧作業が開始され、今では公園となっている。現在のマニラにおいてはスペイン統治時代の雰囲気が残されている唯一の地区となっている。マニラの開発は今では城塞都市の外側で行われていて、城塞内には近代化の影響はほとんどなく、マクドナルドやスターバックスが教育機関のそばにある程度である。近代化の影響を抑えてかつての面影を残すことが優先されている。Intramuros 周辺は堀が形成されていたが、今では埋め立てられており、そこでスポーツを楽しんでいる姿が見られる。



(写真：Intramuros にて)

ビデオを見た後、実際に歩いて Intramuros の Fort Santiago (サンティアゴ要塞) を訪れた。この要塞はフィリピンの国民的英雄ホセ・リサールが囚われの身になっていた場所だ。処刑前日に彼が処刑場に向かった時の足跡がここに残っている。この要塞は、第二次世界大戦時に日本軍が司令塔として使用しており、当時多くのフィリピン人が亡くなった場所である。戦時中にアメリカ軍が軍車で突っ込み、多くの銃弾を受けた。現在もその時の銃弾痕が残っている。Fort Santiago の料金所を左に Baluarte de San Francisco Javier (聖フランシスコ・ザビエル小稜堡)、さらにその左に城壁の外に突き出て Reducto de San Francisco Javier (聖フランシスコ・ザビエル方形堡) がある。城門の中は、レンガ敷きの通路の両側に芝生が敷き詰めてある公園になっている。城門の中の広場は Plaza Armas (武器広場) と名が付いている。



(写真：城門内の通路にて)

次に、Fort Santiago の中にある Rizal Shrine (リサル記念館) を訪れた。ここにはホセ・リサルが当時使用していたコートや帽子、医療器具、本、名刺など、多彩な経歴を物語る多くの遺品が展示されている。リサルは、ヨーロッパ留学で医学と人文学を学んだ眼科医であり小説家・文筆家である。スペイン語で小説を執筆し、スペインの植民地支配によってフィリピンにもたらされた不公正を描き、フィリピン独立運動に大きな影響を与えた人物である。武力闘争指導者として捕らえられ 1896 年 12 月 30 日、Fort Santiago にて 35 才の若さで処刑された。12 月 30 日はリサールの日としてフィリピンの祝日になっている。リサルが監禁されていた牢獄には、最後の夜に机に向かって別れの詩を書く様子が再現された等身大の人形を見ることができる。館内には、彼が滞在した日本で恋に落ちたといわれている日本人女性のおせいさんの肖像画もある。



(写真：ホセ・リサル処刑の絵)

他にも、第二次世界大戦時、日本人がフィリピン人を閉じ込めて満潮時に溺死させた地下牢（The Dungeons of Fort Santiago）や Intramuros の建物の模型が展示されている Baluarte de Santa Barbara を訪れた。地下牢はパシッグ川に面していて、パジッグ川の向こうにはチャイナタウンが見えた。



(写真：地下牢へとつづく階段)



(写真：パシッグ川)

参考資料

フィリピン イントラムロス 旅行・観光情報 | フィリピンプライマー (2019年10月6日アクセス)

<http://primer.ph/travel/category/area/manila-suburbs/intramuros/>

愛知県立大学 堀田英夫 「スペイン語のすすめ」 スペイン語学徒のスペイン語国旅行記
フィリピン マニラ市 編 (2019年10月6日アクセス)

http://hispanista.html.xdomain.jp/ryokoki/Filipinas_2.html

*マニラホテル



(写真：ティータイムの様子)



(写真：マニラホテル資料室にて)

ホテルのスタッフの方が案内してくださった資料室には、マニラホテルに訪れた世界中の有名人の写真が飾っていた。

*パブで働く女性たちへのインタビュー 【執筆者：本間桃里】

パブは、私の知り合いが調査のために働いているお店にインタビューのためにお邪魔することにした。お店はマカティにあった。マラテやマカティには日本人客を相手にするレストランやパブが多くあり、日本語表記の看板があちこちで見られる。私たちが訪れたお店の値段はオープンスペースだと 90 分で 1 人 500 ペソ飲み放題、指名料が 350 ペソで+VAT。何人か指名してほしいとのことだったので、せっかくなので、全員指名するのでよろしくお願ひしますと伝えた。大雨の影響で道がやや洪水状態になっていたの心配だったが、なんとか夜 8 時ごろお店に到着した。お店に入ると、カウンターに 15 名程の女の子たちがずらっと並んでいて、「いらっしやいませ」と挨拶をしてくれた。オープンスペースで席に着くと、早速一列に並ぶ女の子から誰かを指名しなければならなかった。「指名してください」と言われたときに、正直とても困った。お互いのことを何も知らない状態で、判断材料は見た目と雰囲気のみ。どうやって選べばいいのか、何とも言えない気持ちになった。結局は、私と同じ 1994 年生まれの人を聞いて指名した。

隣に来てくれたハンナさん（仮名）は年だけでなく私と同じ 10 月生まれで、日本人のパートナーと遠距離恋愛をしているとのことと意気投合した。私とハンナさんの顔も少し似ていると他のタレントの子に言われ、sister だね! となった。ハンナさんの 29 歳のパートナーはシンガポールでエンターテイナーとして働いているときにお客さんだった人だそう。付き合って 1 年ほど。シンガポールでは今の日本人向けのクラブと違い、ステージで歌を歌ったりダンスをしていた。カラオケで歌ってくれた日本語や英語の歌は、圧倒的な歌唱力だった。パートナーは今度フィリピンに遊びに来てくれると言っていた。普段はラインで連絡をとっているが、パートナーが仕事終わりに付き合いでパブに行くことは少しやきもちをやくし不安になるらしい。しかし、あまり言うとは良くないのでそのことは言わないそう。愛情表現はラインでラブラブなスタンプを送ってくれると嬉しそうに見せてくれた。「日本人男性はどんな女の子が好きなのかな？」と興味津々だった。答えに困り、ありのままがいいと思うと話した（答えになっていない）。将来の話になると、「この仕事は若いうちしかできないから、他の仕事をしたい。今は朝とお昼は大学でホテルの接客の勉強をしているからフロントで働きたい」と語っていた。パブで働いているのは、家族、特に妹の大学の学費を払うためでもあるらしい。妹と自分、両方の学費と生活費を負担しているそうだった。パートナーともいつかは近くで一緒に暮らしたいが、叔母が 30 歳になるまで結婚はだめだと言うらしい。「それまで待てる？」と聞くと、「わからない(笑)」と言っていた。パートナーは大阪出身なので関西弁を教してほしいと言われ、いくつか関西弁を教えるとすごく喜んでくれた。一緒に写真をとり、Facebook を交換した。一緒に話しているとパブに来ているというよりは、友達と楽しくおしゃべりをしている感覚だった。もし私が男性客だったらパートナーの話はしないだろうし、話題もかなり変わっていただろうと思う。毎日勉強しつ

つ働き、将来のことも考えていて、同じ年齢とは思えないくらいたくましく感じた。いつ休んでいるのか、弱音をはけるのか心配にもなった。

【執筆者：松岡萌映】

私が指名したリーズさん（仮名）は日本語はまったく、英語はほとんどできなかったため、コミュニケーションをとるのに苦労した。なるべく簡単な英語でコミュニケーションを取ろうとしたが、複雑な話をするのは難しかった。リーズさんは28歳で、フィリピンパブでの仕事を始めたのは1ヶ月前からだそうだ。前職はセールスの仕事だったという。なぜフィリピンパブの仕事に変えたのかを聞くと、“fun”だからだと言っていた。まだ仕事を始めて1ヶ月しか経っていないからなのか、自分でも言っていたように彼女がシャイだからなのか、英語が苦手だからなのか、なかなか話が続かなかった。タガログ語が話せない外国人も多く来るであろうこのフィリピンパブでやっていくには苦労するだろうなと思った。それでも話をしていると、6歳の息子がいることがわかった。息子はリーズさんの両親と一緒に地方で暮らしていて、会うのは1ヶ月に1度程度だそうだ。息子とあまり会えないことについては「寂しい」と言っていた。結婚はしておらず、息子を産んでからはパートナーもいないらしい。彼氏や結婚の話をする顔をしめていたのが印象に残っている。また、リーズさんの妹も同じフィリピンパブで働いていた。仕事は毎日午後7時から午前3時までで、仕事が終わったら家に帰って寝て、また仕事に行くとを繰り返しているようだった。中盤からはカラオケが始まり、他の女の子たちが日本の歌を流暢に歌っていた。リーズさんにそれらの曲を知っているか聞いてみても1曲も知らないようだった。それでも私のために自分の知っている英語の歌を探して歌ってくれた。カラオケの機械の使い方もままならなかったので、私が代わりに曲を探して入れてあげた。そんなリーズさんは私にはプロのエンターテイナーではなくごく普通の女の子にしか見えなかった。基本給が安く指名料を取らなければ生活している給料にはならないフィリピンパブで生計を立てるには、他の女の子たちのように「男の人に好かれる術」を身に着けなければならないことを考えると、非常に複雑な気持ちになった。

【執筆者：中原慧】

指名したナタリーさん（仮名）は、日本語と英語でのコミュニケーションをとることができた。年齢は25歳であり、息子が1人いる。また、大学へ通っており、卒業後はホテルなどへの就職を希望していた。日本語を覚えるきっかけとして、パブで出会った日本人との交際があったようだ。彼とのコミュニケーションをとる中で日本語を習得できた。一方で、その彼とはパブで出会ったにも関わらず、仕事への理解を示す場合や拒否反応を示す場合など感情の起伏が激しく、ともに過ごすことにストレスを感じ、交際を終了したそうだ。さらに、その彼が大阪弁を使用していたため、大阪弁への恐怖感の

ようなものがあると述べていた。日本語でのコミュニケーションも完全ではない中で、英語も話せない客とのコミュニケーションはあまり取っておらず、ほとんどの時間を UNO やカラオケなど、ゲームをすることで時間を潰している。加えて、名前を含めて、パブ内での出来事などを「Imitation」であると語っており、客からの誉め言葉なども、「Bora Bora (お世辞)」と言っており、パブでの関係性をあくまでビジネス上のものと認識している様子であった。日本への渡航に関しては、仕事ではなく観光目的で行くことを考えていると述べていた。自身のタトゥーが日本で受け入れられるかを心配していた。

【執筆者：山淵あいら】

フィリピンパブに入店すると、カウンターに並んだ 15 から 20 名ほどの女の子たちが笑顔で視線を送ってきたり手を振ってきたりしている。各々が客に対してアピールしているようにも見える。

40 代くらいのお店のママが流暢な日本語で席へと案内してくれ、おしぼりを渡してくれた。一人ずつ女の子を指名するように促される。指名しなければならないことは事前に聞いていて「適当に好みの子を選べばいいだろう」と軽く考えていたが、実際にその状況になるとなんとも表現しがたい感情で胸が締め付けられ体が硬直した。自分と同性同年代の人間を商品であるかのように比較・選択し指名する行為に、嫌悪のような感情でいっぱいになり涙が出そうにさえなった（目の前で他の女の子が指名され、自分は「選ばれなかった」という人がうまれてしまうことへの申し訳なさ？もあったかもしれない）。指名への嫌悪感からの「逃げ」のような気持ちから、容姿などでは無く、もっと客観的な条件でもって選ぼうと思い、「私と同じ 1995 年生まれの方で」と言ってみた。残念ながら同い年はおらず、さらにしばらくの間渋っていたが、先生にも「そういう場所だから。指名しないと始まらないから。」と促され、目の前で一番視線を送っていた女の子を指さした。

マリン（仮名）、21 歳。「選んでくれてありがとう。あなたの事かわいいなと思って、選んでほしくてずっと視線を送っていたんだよ、気がついた？」と人懐っこく笑いながらあいさつしてくれた。体のラインが強調されるピッタリとしたシャツに短いタイトスカート。胸に名札をつけている。ドリンクをオーダーし、自己紹介から会話を始めた。会話は主に英語で。（下線部は日本語）

マリンはシングルマザーで 1 歳の娘が地元にいる。両親と祖母が世話をしており、娘と会えるのは月 1 くらい。未婚まま子どもを生んだが、去年その彼氏とは別れた。私が「結婚したい？」と聞くと、「結婚はしたくない。だって男の人はみんな **ParuParo**（蝶々：浮気者）でしょ。日本人の男の人もそう。スケベでしょ。」弟と妹はまだ学生で、田舎で両親と一緒に住んでいる。自分の稼ぎは田舎の家族にほとんど送金しているという。最低日給 400 ペソ。彼女は 600 ペソ。指名などでポイントを稼ぐと給料が高く

なる。ベッドスペースに友達と一緒に住んでいる。勤務時間は19時から27時。いつも帰宅したら寝て、18時頃に起床して出勤というサイクルだという。

「指名するのは気まずい気分だった」と伝え、カウンターに立ってる時、どういう気持ちか尋ねると、「指名してくれた人は helper だ」と話していた。おしゃべりしながらも、私のお酒が減ればすかさず注いでくれ、コップに結露がつくと自分のおしぼりで丁寧なふいていた。私がトイレに立つと、一緒についてきてくれて、扉の前でおしぼりをもって待っていてくれた。いつもお客さんがトイレに行くときはそうするそうだ。お店の奥には「VIP ルーム」がある。料金は1800ペソ（90分）。女の子に入る料金は変わらない。カーテンで仕切ることができる半個室。ジェンガなどのトランプがある。VIP ルームを見に連れて行ってもらったが、その日は一室が使用されており、私たちとすれ違いで60代くらいの男性が出ていった。個室であるため「スケベ」な人はおさわりを強要してきたり、服を脱ぐよういつてきたり。そのためVIPよりもオープンスペースのほうが良いと話していた。胸を触られることも少なくないという。服を脱いでと言われてNoと断ると、じゃあゲームで負けたら、と野球拳のような形式で服を脱がされることも多いという。彼女は下着までは脱いだことはないと言っていたが、男性の側が下着まで脱ぐことはある。お客さんと個人的な関係になることもあるかと聞くと、最初は「無い。お店ではBora Bora（お世辞）を言ってるだけ」と話していた。そのあとに改めてその話題になった際、「実は一度だけ、お客さんとデートに行ったことがある」と教えてくれた。29歳で好みのタイプでハンサムだったため、「一回だけでもいいから」相手にそう伝えたと話していた。



(写真：店内奥にあるVIPルーム)

【執筆者：金城琴音】

私が指名したのは、21歳のアニーさん(仮名)。容姿などで指名することに罪悪感があったので、自分と同じ21歳であるということを理由にして指名した。日本語はあまりできなかったが、英語は話せた。とても美人だったのでそれを伝えると「ありがとう、あなたも、他の人もみんな可愛いよ」と言ってくれた。話を聞いてみると、このパブに入って5ヶ月ほどらしい。なぜパブで仕事をしようと思ったのか聞いたら、「lazyだから」と返ってきた。勉強が苦手で、大学に行くのが面倒だったらしい。行ってみたい国は日本らしく、普段パブで日本人男性を相手にしていることもあり日本の曲を沢山知っていた。私の前に座っていたハンナさん(本間さんとペアの方)を指差して「あの子は一番カラオケが上手なのよ」と紹介してくれたが、本人も歌ってみたらすごく上手だったので驚いた。AKB48の恋するフォーチュンクッキーをみんなで踊ったりと、英語があまり話せない私に対してもなんとか盛り上げようとしてくれた。気を遣わせてしまって申し訳ないと思った。彼氏はいるのかと聞いてみたら、最近彼の浮気が原因で別れたらしい。「男の子なんてみんな同じ。スケベなだけよ」と諦めにも似た表情で言っていたのが少し悲しかった。パブで働くことによる弊害の1つに、男性を信じられなくなることが挙げられるのではないかと考えていたが、彼女が「同じ」と述べたことから、パブに来る良くない男性のイメージが彼女たちの中での一般の男性のイメージを作っていると感じた。家族構成は両親、姉、弟で、両親がパブで働くことに関してどう思っているか聞いてみたら、「少しは悲しく思っていると思うけど、仕方ないしお金を稼がないといけないから」と言っていた。帰り際、「また来てね。明後日ならいるよ。今度も私を指名してね」と言われた。少し距離が縮まって嬉しく思う反面、固定客を付けないと稼げないのだろうなと思って複雑な気持ちになった。

【執筆者：飯塚彩】

メンバーの知り合いが働いている関係で、マカティのパブを訪問した。到着時の店内はガラガラで、カウンターに一直線に並んだ15人ほどの女性が挨拶をしてくれた。店のママさんが「この中から指名して」と私たちに言って合図をすると、彼女たちが一斉に手を振ったり声をあげたりして私たちにアピールを始めたので、そのスイッチに驚いてしばらく誰も指名することができなかった。よく知らないうちに人を選ぶという行為にとっても抵抗はあったが、時間をかけてもったいぶって指名をするのも憚られたので、たまたま目のあった左から2番目の女性を手で示して呼んでもらった。

リナさん(仮名)22歳。お話し上手で、(どこまで建前かわからないが)日本が好きだと言っていたので日本語を交えることもでき、とても話しやすかった。リナという名前も日本人のお客さんが付けてくれたものだそうだ。来年から日本で働きたいと思っていて、この秋か冬に一度日本に行くと話していたが、特に具体的なプランやツテがあるわけでは無いようだった。周りに日本で働き始めた知り合いどころか海外で働く知り

合いもおらず、フィリピンでは10人に1人が海外に出稼ぎに出ていることを話すと驚いていた。途中で他のお客さんから指名が入り離れたが、最後にまた戻ってきてくれた。

カナエさん（仮名）24歳。リナさんが他のお客さんから指名されたため、その代わりとして私についてくれた。他の人から指名された場合は30分単位で席を離れることになっている（VIPの場合などは別対応で外に同伴に出ることもある）。現在小さな娘がいて、半年間ほぼ毎日この店で働いているそうだ。この店に来た理由は給料の良さで、この店で採用されたことによりかなり満足しているようだった。彼女の付けているヘアピンがキラキラしていて可愛いと私が言うと、もう一つ同じものが控室にあるからあげると言って、わざわざ裏に取りに行ってくれた。代打として私に付いてくれていただけなので当然申し訳なく感じ、一度は断ったが、たくさんあるからいいと言って渡してくれた。他のお客さんにもこのようなサービスをしているのかと聞くと、お客さんは男だからね〜と笑って否定した。

レイさん（仮名）。カナエさんもまた指名が入ったため、10分ほどではあるが代わりとしてついてくれた。1ヶ月ほど前にこの店で働き始めたそうだが、「前は何をしていたの？」と聞くと「あなたには関係ない」と教えてもらえなかった。口数の少ない人で、家族構成のことぐらいしか彼女自身のことはほとんど聞けなかった。「お客さんの話を聞くのが好き」と自分でも話していた。

2 日目： 2019 年 8 月 27 日 (火)

CFO 【執筆者：本間桃里】

*CFO 職員ポールさんのお話

はじめに見せていただいたビデオでは 24.4 億人もの移民が世界中にいること。フィリピン人がより良い人生を求めて移民になること。送金がフィリピンの GDP の 10.7% を占め国を豊かにしていること。一方で頭脳流出 (Brain drain) や移民の女性化 (feminization of immigration)、人身売買 (human trafficking) などの問題があることも挙げられていた。「国の経済を支えるのは誰か」を考えなければならない。移住者は日本などに行くことで自分や家族の生活を良くしようとするが、それは決して個人的なものではない。

フィリピン人海外委員会 (CFO: Commissions on Filipino Oversea) は 1979 年に設立された、フィリピン政府機関である。2010 年に New Law Migrant Filipino Welfare Act ができ、それまで「移民」とは日系人のような長期滞在の人々を指していたのに対し、「海外にいる全てのフィリピン人 (“All Filipinos living abroad”)」に定義が広がった。CFO が対応しているのは海外で永住するフィリピン人 (Filipino permanent residents abroad) である。フィリピン海外雇用庁 (POEA: Philippine Overseas Employment Administration) は EPA や技能実習生などの労働者 (temporary workers)、海外労働者福祉庁 (OWWA: Oversea Workers Welfare Administration) は怪我や死亡事故を含む、フィリピン人労働者とその家族への社会・福祉サービスを提供している。2013 年には Philippine Statistics Act ができ、フィリピン人海外労働者 (OFW: Oversea Filipino Workers) に関するデータを集めるようになった。

CFO では永住者にたいして渡航前オリエンテーション (Pre-Departure orientation) を行っている。オリエンテーションは国と年齢でグループごとに分けて行われる。具体的には、13 歳から 19 歳のセッション、20 歳から 59 歳のセッションに分けられる。12 歳以下とシニアのオリエンテーション受講は免除されている。13 歳から 19 歳の悩みは、「フィリピンを離れたくない」というのが最も多いそうだった。実際に 13 歳から 19 歳の渡航前オリエンテーションを少し見せていただいた。アメリカに渡る 15 名ほどの子どもたちがオリエンテーションを受けていた。オリエンテーションをしていたのはカウンセラーの資格を持つ、子どもたちと年齢が近い若い女性職員だった。子どもたちが楽しくなれるようなプレゼンテーションをしていた。アメリカでは 18 歳以上の男性の永住者は military service が義務とのこと (要確認) で、その説明がされていた。途中、カウンセラーの方がこちらに一瞬来て、CFO の職員と何かを話していた。どうやら、アメリカ行きに乗り気じゃなく、個人的なカウンセリングが必要だと判断した子どもがいたらしかった。その子どもとは、カウンセラーが後で個別に話をするそうだ。渡航前オリエンテーション以外にも、18 歳から 39 歳を対象にした Guidance and Counseling

Program や、ヨーロッパの家事労働者を対象にした Country Familiarization Seminar や Financial Literacy Program など CFO によって提供されている。

次に、フィリピンでの法律についてのお話を伺った。例えば、フィリピンでは 2003 年から二重国籍が認められており、その法律の制定は CFO も関わっていた。遠くにいてもフィリピンのアイデンティティを保持できるようにという願いがあるとのことだった。日本に住む JFC の子どもたちに対しても、「私達の子ども」という言い方をしていることが興味深かった。日本では JFC の子どもたちは、たとえ日本国籍を持っていたとしても「ハーフ」や「ダブル」と呼ばれ、「私達の子ども」と呼ばれることはなかなかないのではないだろうか。また、フィリピンでは Pen-pal などのマッチングビジネスは違法である。同性婚もできない。さらに、フィリピンには離婚がない。そのためフィリピン人女性のパートナーが既婚かどうかを確かめるシステムが CFO にあるという。しかし、なかには独身証明書の偽装をする人もいて、対応が困難である。日本人男性とフィリピン人女性の間の結婚にまつわる問題としては、知らない間に離婚をされてしまうケース、アルコール依存や DV などが挙げられていた。

受付カウンターの見学もさせていただいた。CFO に来る人は事前にオンラインで予約を取っている。火曜日はアメリカ、カナダ、ニュージーランド行きなど様々なセッションが行われるため、特に混雑するそうだった。登録を済ませ、400 ペソを払い、セミナーを受ける。その後、パスポートにセミナーを受けたという証明になるシールが貼られる、というのが大まかな一連の流れだ。渡航前オリエンテーションは既に有効な VISA を持つ人が受けられるのに対し、カウンセリングのプログラムはいつでも受けられるとのことだった。CFO の対応にクレームがある場合は 888 のホットラインで受け付けている。特に書類の提出に関するクレームや、アシスタンスが十分でないというクレームが多いそうだ。CFO はこれらのクレームに 24 時間以内に対応する義務がある。CFO はフィリピンに 4 つのオフィスがある。マニラ、セブ、ダバオ、そして空港にもあるが、空港はオリエンテーションを受けなくてもいい人のみに対応している。

*CFO 職員ジョンさんのお話

結婚移民の人たちには、偽装結婚を防ぐためにも特にパートナーのことをどのくらい詳細に語るができるかを聞き取る。パートナーのどんなところが好きなのかも聞くそうだ。オリエンテーションでは文化的な差異についても触れる。フィリピンでは“Pakikisama”：following what others do という価値観があり、集団内の空気を読むことが重視されていることが紹介された。日本と似たような価値観があることに驚いた。Paul さんも話していたように、経済的な理由でフィリピン人女性が外国人男性とマッチングさせられることは、2016 年 7 月 21 日の Anti-Mail Order Spouse Law によって禁止されている。Pangangalakal ng Tao = 人身売買は年に 150 billion ドルもの利益を人身売買者に与えているとも言われている。人身売買は Acts (recruitment など)、Means

(deception など)、Purpose (prostitution, slavery, sex-tourism など) の三つで構成される。子どもの性的搾取を目的にしたツアー (Child sex tourism) は最年少が2ヶ月だったそう。最近ではオンラインでの売春やパートナーが人身売買者である可能性も視野に入れなければならないとのことだった。フィリピン政府はアメリカが出す人身売買に関する報告書 (Trafficking in Persons Report) では高評価である。人身売買が疑われるときは、1343 の Action line につなぐこと、最後は “Ang Laban sa human trafficking” というメッセージでプレゼンテーションが締められた。



(写真：ジョンさんからのレクチャー)

【執筆者：中原慧】

担当の CFO (Commission of Filipinos Overseas) 職員ジョンさんより、CFO の業務内容や設立に関わる法的な枠組みなどの説明がなされた。また、特にジョンさんが担当している、反人身売買に関わる業務内容や実際に取り組んだ事例、人身売買であると判断する基準などを解説してもらった。以下は、ジョンさんのセミナー内容及びそれに基づく考察である。

結婚移民としてわたるフィリピン人や労働者として海外で生活しているフィリピン人など多くのフィリピン人が海外で生活している。また、結婚移民として国外へ行くフィリピン人の9割以上が女性である。旧宗主国であるアメリカへの移動が最多であるが、日本への移動も17%を占めている。基本的な結婚相手との出会いは、親戚等を通じたものが多いが、近年ではインターネットを介したものが増加している。

先述のように SNS やインターネット上のマッチングサービスを通じた、外国人男性

との出会いが増加していることが指摘されていた。このような経路での出会いや結婚は法律上で禁止されている一方で、実態としては多くの人々が利用している。このような法律と実態の乖離は、CFO 職員へのプレゼンテーションに関する報告内での中絶に関する人々の行動にも表れており、法律上の規制が、実質的には効力を発揮していない問題がある。また、後述の人身売買の判断基準に照らすと、国際結婚の中にも人身売買ともいえる事例もある。裕福な先進国の男性との婚姻の目的が送金である事例も報告されており、実態が人身売買であることも問題視されている。加えて、文化的差異による障壁以外にも、ドメスティックバイオレンスなどの被害を受けるなど、様々な困難に面しているフィリピン人が多い。

人身売買については、フィリピンがその送り出し国、中継国、受け入れ国の3つの要素を持っている。特に、多くの島々で構成されていることもあり、人々の輸送が容易かつ監視が困難であることも影響していると指摘されていた。また、人身売買の送り出しと受け入れがフィリピン国内で行われている事例も紹介された。それらに対して、CFOをはじめとした機関が対処している。特に、先住民 (Indigenous People) に対する人身売買の事例が紹介された。先住民が狙われる要因として、フィリピン国内の「地方部から都市部へ」という人身売買の経路がある。

RA 10906 ANTI-MAIL ORDER SPOUSE LAW

The Republic Act 10906 is an act providing stronger measures against unlawful practices, businesses, and schemes of matching and offering Filipinos to foreign nationals for purposes of marriage or common law partnership. It became a law on **21 July 2016**.

THE ANTI-TRAFFICKING IN PERSONS ACT
REPUBLIC ACT 9208 (AMENDED BY RA 10364)

| ACTS | MEANS | PURPOSE |
|---|--|---|
| Recruitment Obtaining Hiring Providing Offering Transportation Transfer Maintaining Harboring Receipt of person Adoption | Threat Use of force Coercion Abduction Fraud Deception Abuse of power or position Taking advantage of vulnerability Giving or receiving of payments or benefits to achieve the consent of person having control over another person | Prostitution Pornography Sex Tourism Forced labor or services Slavery Involuntary Servitude Debt Bondage Removal or sale of organs Engage in armed conflict |
| with or without the victim's consent or knowledge | over another person | *within or across national borders |

フィリピン政府は、人身売買か否かを判断するための3つの判断要素を定め、そのうちに1つでも当てはまる場合に人身売買と判断していた。その3つの要素とは、Act・Means・Purpose である。特に、注目すべきは、仮にその形態が雇用や労働という正当なものの場合も、被害者の合意や知識に関わらず、その用いられた手段が違法なものである場合には人身売買と判断している。注目すべきは、手続き的には合法でも、その背後にある手段の部分に本人の意思を歪めるようなものが行使された場合には人身売買と判断できる点である。これにより、情報格差や法的な知識の不足などから、自身の状況を搾取や人身売買と判断できない人々も救助することが可能となる。

これらはフィリピン政府独自ではなく、国連の「国際的な組織犯罪の防止に関する国

際連合条約を補足する人(特に女性及び児童)の取引を防止し、抑止し及び処罰するための議定書」(2000年採択、2003年発効)の第3条の人身取引の項目に準じたものであり、フィリピン政府は国際的な基準で対処している。また、2003年にフィリピン政府は反人身売買に関する法律を制定し、2012年にはCFOの機能を拡張する改正も行われた。日本の国会承認が2005年であることや国内での不十分な法整備(羽場 2010 p. 188)を鑑みと、フィリピン政府が人身売買に対して積極的に取り組んでいる姿勢が見て取れる。

更に、人身売買に対する取り組みをCFOのみで行わず、他の省庁を巻き込んだ横断的な形での対処を試みている。省庁間での連携に加え、NGOやNPOなど民間での活動もネットワークに加えることで、より実践的な対処を目指している。

しかし、フィリピン政府の取り組み事例は事後的であり、出国前での取り組みや国内での人身売買を未然に防ぐことには未だ課題がある。近年でもフィリピン国内での人身売買からの救助など、多くの人身売買の被害者の救出を実施していると報告があったが、事前に人身売買であり出国を停止できたという事例の紹介はなかった。

ジョンさんの話とフィリピン政府の外貨獲得手段としてのOFW(Overseas Filipino Workers)の存在は、矛盾しているように思えた。フィリピン政府としては、OFWに送金を一つの外貨獲得手段と位置付けており、ビザの申請・承認の迅速化などを進めている。しかし、人身売買の定義にはその人身の取引方法に加えて、その使用目的が含まれているが、雇用主や受け入れ先の機関の意図を、書類や面接によって完全に把握することは困難である。従って、国外に自国民を送り出すこと自体が、搾取構造を支えるものとなっているのである。

現在でも、フィリピン政府は非常に厳格な審査を行っているに関わらず人身売買の被害は継続している。つまり、人々の移動に伴う審査の厳格化や渡航先での監督や支援の強化に加えて、更なる政策的な取り組みが必要であるといえる。フィリピン国内での審査以外での取り組みの必要性としては、貧困に窮する家族への義務感などから被害者自ら搾取構造に取り込まれる場合があるからである(斎藤 2010 p. 120)。それらは、地域社会における文化的慣習などが関連しているとされる。加えて、B. Kevin (2007)は、政府の腐敗や乳児死亡率などの要因が、国内からの人身売買を促進するものであると指摘している。つまり、政府の腐敗や乳幼児の健康状態、貧困の改善は国内での取り組みで対処できる。従来の対策以外にも、人々を搾取構造へ導く構造への取り組みも進めるべきである。

本来的には、雇用主や受け入れ機関が搾取的な目的を持たないことが必要である。しかし、羽場(2010)が指摘するように、資本主義下における低価格が競争力の源泉として機能していることや、人身売買による「ただ働き」が利潤を生んでいることが、人身売買の促進要因であるため、受け入れ国での対策を進めることは困難であろう。特に、日本を支えている中小企業や価格以外での差別化が図れない企業にとって搾取は極めて

有効な手段に映るだろう。現在の日本の政策には、効率の悪い企業の淘汰を進め、新たな産業へ資源を促すという政策はなく、むしろ中小企業支援の名目で非効率な企業を残すような政策がとられている。今後は、搾取に依らない経営を行える企業のみを残すためにも、積極的に非効率な企業を淘汰する政策をとるべきであろう。

参考資料

齋藤百合子, 2010, 「グローバリゼーション下の人身売買と家族の変容」 『比較家族史研究』 24 巻 111-138 頁.

羽場久美子, 2010, 「グローバリゼーションとトラフィッキング—EU・日本に見る実態と戦略—」 『年俸政治学』 61 巻 2 号 174-193 頁.

Bales, Kevin, 2007, “What Predicts Human Trafficking?” *International Journal of Comparative and Applied Criminal Justice*, 31: 269-279.

*結婚移民の女性たちへのインタビュー

結婚移民の人たちはまずオンラインで事前に自身の情報を送り、CFO では紙媒体で情報を入力する。その後グループでセミナーを受け、個々人で15分から30分の面談がなされる。そこでどのくらいパートナーのことを知っているか、心配なことはないかなど、職員による聞き取りがなされる。今回、これから日本へ行く結婚移民の人たちへのインタビューをさせていただくことができた。3人から4人のグループに分かれてディスカッションをした。

【執筆者：本間桃里】

私がお話したダイアナさん（仮名）は、21歳でDating site で出会った47歳男性と結婚する予定だ。ダイアナさんは日本に行ったことがないが、旦那さんが3回ほどフィリピンに会いに来てくれたそうだ。今の気持ちを聞くと、worried と happy の両方だと言っていた。行き先は名古屋だそう。相手は英語もタガログ語もそんなにできないので、Google 翻訳でコミュニケーションをとっている。どこでデートをするのかを尋ねると、Robinson Shopping Mall だと言っていた。パートナーと一緒に肩を並べて写っている写真を見せてくれた。好きなところは、やさしいところだと言っていた。他の結婚移民の女性たちもデートの場所はRobinson だと言っていて面白かった。同じグループのジャスミンさん（仮名）は34歳でお相手は65歳タクシードライバーだ。既に姉が群馬県に住んでいて、彼女の紹介で知り合ったらしい。山形で、旦那さんと旦那さんのお母さんと暮らすことになるらしい。会話のところどころで、私が知っているタガログ語の単語を口にすると、とても喜んでくれたのが嬉しかった。はじめはお互い緊張した感じだったが、ほんのちょっとしたことでice breaking ができるのだと思った。

その後プレゼンを発表したけど、みんな熱心に聞いてくれていた。「この人たちは日本で幸せになれるだろうか」そんなことが時々頭をよぎった。ただ、今年は去年私が考えたことと少し違った。去年は年の差があることに対してかなり懐疑的だったが、この1年、結婚移民の方のフェイスブックで旦那さんや家族と仲良く暮らしている写真を見る中で、上手くいくケースもあるのだと安心した。上から目線で人の結婚をどうこう言うのは良くないが、去年はどうしてもフィリピン人女性を「かわいそう」と見てしまっていた。今年は、「上手くいくケースもある」という意味で安心もできた。もちろん全体的に若い女性が年上の男性と結婚をすることには社会構造を感じざるをえないが、それだけにとらわれてしまうと良くないとも今年は思った。年の差や人種や同性婚なんかも、「何が理想の結婚か」社会構築されてきたものなのだと感じる。

夜、ダイアナさんがフェイスブックで友達申請を送ってくれていた。彼女のページを見ると、1人で写っている写真ばかりでパートナーの写真はなかった。それに、depression のページをシェアしていたり、feel worthless などネガティブな投稿がされていたりして、やはり心配な気持ちはなくならなかった。

【執筆者：中原慧】

エミリーさん（仮名）、年齢は21歳であり、出会いはTinderである。言語的には、英語と日本語でのコミュニケーションに困難を抱えている。現在は、タガログ語で書かれた日本語学習教材で勉強をしている。結婚相手の男性は、50歳の福島県在住である。現在の仕事内容の詳細は不明であり、また、婚姻経験などプロフィールについて詳細をあまり知らないようであった。彼女自身は、日本では主婦業をすると述べている。これまでの結婚相手と会った回数は5回であり、いずれもフィリピンである。基本的に、あまり本音の部分を喋りすぎるとCFOへ伝わる可能性もあり、本心を聞くには至ることが出来ない状況であった。

その後のプレゼンテーションでは、写真やビデオを撮る方もおり、事前に聞いていたよりも熱心に聞いている印象を受けた。しかし先述のように英語に困難を抱える人が多く、英語の文を中心とする発表スライドでは分かりづらい部分もあったと感じる。タガログ語で行うことがベストであるが、次善の策として文章を極力排除し、視覚的に伝えるスライドにすることも必要であると感じた。

【執筆者：金城琴音】

私がお話ししたのは中原さんと同じグループのエミリーさん（仮名）という方で、20歳。Tinderで知り合った50代の日本人男性と結婚予定らしい。フィリピンで5回会ったことがあり、日本人男性には子どもが2人いるが離婚している。子どもの年齢は26歳であり、自分よりも年上であるけれど気にしているわけではなさそうだった。結婚する理由を聞いたら、彼の人間性に惹かれたと言っていた。しかしどこまで本当かは分からないと思った。子どもは欲しいと言っていた。女の子がいいらしい。移住予定先は福島で、ハウスキーパーになると言っていた。エミリーさんはとてもシャイな印象で、あまり英語が得意そうではなかった。どうやって彼氏とコミュニケーションをとっているのか聞いたら、彼氏がタガログ語を少し話せるらしい。親は結婚して日本に行くことについてどう思っているのか聞いたら、悲しんでいると言っていた。

【執筆者：山淵あいら】

ローズさん（仮名）、32歳。静岡県に移住予定。日本人夫、59歳。2人の娘がいる。日本への移住は自分のみ。出会いは1年前。夫がフィリピンに観光で来ていた時に、友人の紹介で知り合った。ビザが下り次第すぐに日本に渡りたいと考えている。3か月後の12月頃かな、と話す。夫は日本でゲームビジネス、今は夏休み(?)でマニラ市内のホテルに滞在しているらしく、一緒に過ごしているという。これまでも、フィリピンで2か月に1度の頻度で会っていた。本人が日本に行くのは今回が初めて。日本の楽しみなことは日本食と、きれいな街で過ごすこと。不安なことは夫とのケンカ。日本語を勉強しており、夫もタガログが少ししゃべれる。主に日本語で会話をしている。ローズ

さんは現在は仕事していない。夫からのお小遣いで生活しているそうだ。前職はレストランのウエイトレス。

インタビューののち、結婚移民の方々へ向けて各自準備してきたプレゼンテーションをおこなった。テーマは、四季と文化、学校行事、学校制度、国際交流協会の活用、自治会の活用、子ども食堂、セクシュアル・リプロダクティブヘルスについてである。プレゼンテーションをする側も聞く側も英語が第一言語ではない点で、情報がどこまで伝わったか不安が残った。分かりやすい話し方や流れ、情報の整理など、改善の余地があった。それでも耳を傾けてくださったことに感謝したい。



(写真：学校行事について紹介)



(写真：セクシュアル・リプロダクティブヘルスについて紹介)

* 国立自然史博物館【執筆者：今岡哲哉】



(写真：国立自然史博物館)

国立自然史博物館は立派な石造りの建物である。CFOでの予定が延長したため、国立博物館の見学は30分程度しかできなかった。そのため、博物館のガイドの方が速歩で重要な箇所だけ案内して下さった。本当は絵画などの芸術作品も豊富に揃えてあるようだが、私たちが見学したのは動物、魚類や昆虫の標本など、主にフィリピンの自然に関する展示だった。

ガイドの方や同行していたフィリピン政府職員の方々によると、この博物館の目玉は世界で最も大きなクロコダイルの標本らしい。CFOでの行事を終えて疲れ気味の私たちと比べて、フィリピン政府職員の方々には元気いっぱいだった。見学の終盤で、一階の展示室に吊るされたクロコダイルの白骨を見た。最初は恐竜の骨格だとばかり思い込んでいたので、特に初見で驚くこともなかったが、確かにクロコダイルとしては大きかった。クロコダイルを背景に何枚か集合写真も撮影した。



(写真：クロコダイルの標本)

印象的だったのは、国家の威信をかけた博物館の敷地内にも、ホームレスの人々が横たわっていたことである。たくさんの子どもも駆け回っており、日本との違いを実感する一幕だった。



(写真：博物館敷地内で生活する人々)

帰り際、他の学生たちがイグレシアの教会を指して話題にしていた。イグレシアとはフィリピンで一定の支持を獲得しているキリスト教の一派で、カトリックなどの伝統的なキリスト教宗派とはかなり隔たりがあるらしい。JFC やその母親たちも、イグレシアに篤い信仰を寄せていることがしばしばあるという。

ノブヨさんと中華鍋 Ping Yang 【執筆者：金城琴音】

19:00 から日本人の父とフィリピン人の母を持つノブヨさん(仮名)と、母のチェさん(仮名)と共に Ping Yang Hot Pot にて夕食をとった。チェさんにお話を詳しく聞いた。チェさんは現在 45 歳で、フィリピンにて宝くじの販売員の仕事をしている。若い頃エンターテイナーの仕事のため 6 回ほど日本に行き、合計 3 年間ほど滞在していた。マニラは給料があまりに安く、長く働いていても昇給しないため、日本に移住し働き、フィリピンにお金を送った。仕事の時滞在したのは北海道と長野県だった。チェさんが初めて日本に来た時は 16 歳で、未成年が日本に来て働くことは違法であったため、戸籍謄本を改ざんし、化粧をして 22 歳だと偽って日本に来た。周りの人たちがビザ切れ後にも関わらず滞在しており、そうして欲しいとフィリピン人の同僚に頼まれても、チェさんは絶対やらなかった。日本に来られなくなるのが嫌だったらしい。フィリピンの会社で出会った 15 歳年上の日本人の旦那さんと結婚して娘のノブヨさんが生まれたが、14 年前(2005 年)、ノブヨさんが 7 歳の時に旦那さんがフィリピンから日本に帰国し、それから突然連絡がつかなくなり、養育費も払わなくなった。ノブヨさんはお父さんのことをほとんど覚えてないらしい。チェさんは、旦那が他の女の人と浮気をしているよりは、死んでいた方が気が楽だと言っていた。チェさんが今住んでいるのはマラボンというマニラから 2 時間ほどかかる場所にある静かな街。チェさん曰く、色々な面で日本はフィリピンより恵まれている。ただ日本は一人暮らしの場合の家賃が高いのでそこは不便だと言っていた。チェさんは日本で遊園地やカラオケなどを楽しんだと言っていた。ディズニーランドに行ったことがないので行ってみたい、と話してくれた。食事の際にも、「もっと食べなくちゃダメだよ!」と心配してくれたり、「私があなたくらいの年齢の頃は、すごくお喋りで活発だったのよ。もっと遠慮せず話していいよ」と励ましてくれたりした。チェさんは本当に明るく優しく、これまでの人生で辛かったことや苦しかったことを乗り越えてきた強さを感じた。



(写真：中華鍋を囲んで)

3 日目： 2019 年 8 月 28 日（水）

*Personal Ability Development 財団【執筆者：山淵あいら】

Personal Ability Development 財団（以下 PAD 財団）は、フィリピンや台湾をはじめとする東南アジアのグループ会社や提携企業と連携し、日本への外国人労働者の派遣ならびに紹介事業を行う N. T. トータルケア株式会社の日本語教育機関である。N. T. トータルケア株式会社は、日本の労働力不足を解消するとともに、求人が不足している発展途上国の求職者に雇用機会を提供することで、相互の不足を補い合う WIN-WIN の関係を構築することを目指し、現地で就職説明会や日本語研修を行っている（N. T. トータルケア株式会社HP）。2007 年、マニラ首都圏モンテナルパ市に PAD 財団を創設した。以下は、同財団に創立当初から関わられている石川哲哉氏への聞き取りと、施設見学をもとに記述する。

同財団の日本語教育事業は 2007 年に始まる。当初は、日系の子ども達を対象に 12 か月に及ぶ日本語訓練を無償で提供した。生徒たちは学習期間中ほとんど缶詰め状態で日本語の学習に励んだという。ここで日本語を学んだ日系の子どもたちは就労機会を求める母親らと共に日本へと渡った。彼らの中には中学を卒業し高校に進学した者も少なくないそうだ。同財団は大使館が推奨する日本語学校（全 8 会社）のひとつにも選ばれた。フィリピン人母と日本人父を親に持つ子ども（Japanese-Filipino-Children : JFC）の認知に関する法的支援を行うマリガヤハウス等の NGO や NPO との連携もある。同財団は日本語教育や移住、就労などといった認知取得後の支援を担っている。同業者の中には「まごのて」などに代表される悪徳仲介業者も存在する。こういった人身売買とも呼べる悪質な就労斡旋の被害者に対応する相談窓口としても機能しており、大使館への被害申請を行った事もあるという。現在は相談窓口は閉業している。その理由は、相談者の減少と、そもそも日本政府の入管法厳格化でビザが下りにくくなったからである。

同財団を経て渡日した日系の子ども達の日本での生活は、必ずしも健全なものばかりでは無かった。クラブや風俗店で働かされたり、生活費や学費を稼ぐために自ら工場や夜のお店での就労を選択する事例が多く見られた。フィリピン人母と共に日本に移り住んだ 19 歳の少年が建設現場で亡くなった事故もあった。かつて支援していた日系人や JFC は現在 20 から 30 歳になっている。派手な化粧や服装に身を包んだ「ケバケバした姿」の写真が FaceBook などの SNS に投稿されているのを頻繁に目にするという。

同社は、2002 年頃のアロヨ大統領と小泉首相の交渉における日比経済連携協定の大筋合意を受けて、日本語教育事業の先行投資を開始した。2008 年国籍法改正に先んじて創設された PAD 財団ではあるが、開始時期としては遅いほうだったという。最も早く日系人への支援を開始したのは新日系人ネットワーク・セブ（SNN）の 2005 年である。この団体はフィリピン人母とともに新 2 世の身元確認調査、無料の日本語教室解説、日本への就労支援等を行っている（日刊まにら新聞 2006 年 3 月 12 日）。新日系人を対象とした相談窓口をメインに行っていたが、それでは経費を賄えず、相談者から参

加費として 3000 円を徴収していた事が問題になったこともあったと石川氏は述べている。

PAD 財団における EPA や家事労働者の育成に向けての日本語教育は創設当初から食費と宿泊費は無償提供、正規雇用として給料を支払いながら日本語などの勉強をしてもらうという形態をとってきたが、今年（2019 年）からは最初の 2 か月分の生活費のみは自費で支払ってもらう形に変更した。この変更で生徒たちはより勉強熱心になったと石川氏は感じている。

マニラ首都圏モンテンプルパ市にある同財団ビルには、日本語教育機関のみならず、英語教育事業や介護等の実習施設など、同財団が手がける複数の事業が併設されている。2014 年以前まではマニラ市内の各所に点在していたものを当ビルに集合させた。

1 階は、英会話オンライン教室 Brent English Online に使用されている。仕切りが置かれた机ごとに PC が設置されており、ヘッドマイクをつけた講師が日本人生徒に遠隔で英語指導を行っている。在宅で勤務する講師もいるが、授業の質を確保するためにこのブースを設置したという。小学生から 70 歳の高齢の方まで、幅広い年代の生徒が受講している。生徒のレベルや関心に応じて 20 のオリジナルテキストから教材を選択する。大手予備校の河合塾を通して、新入社員や学生に対する英語指導を委託されたりもしている。カナディアンアカデミー神戸の協定校でもあり、会社名が悪用されるほどブランド価値が認められているアジアで一番の英語スクールだそうだ。

2 階から上階は介護実習室や日本語教室などが設置されている。授業中の生徒たちは、教室の外から見学する私達に向かって一斉に「こんにちは」と丁寧に挨拶をしてくれた。ここで学ぶ技能実習生や EPA 候補生たちは既に日本での就労先が決定しており、6 か月間の渡日前研修として N4 取得レベルまで日本語を学習する。技能実習生の場合は高卒の人も多い（EPA は大卒必須）。教室によって男女比にかなり相違が見られたが、男性がほぼ 100% の教室は重工業や加工業など（焼津のトンネル工事会社、水産加工、イスズ、等）の技能実習生の教室で、女性の割合が多いのは介護や看護の実習生や候補生の教室であった。講師には、過去に EPA 介護士として日本で就労した経験のある方や、日本への渡航経験が無いが N2 を取得している方もいるそうだ。廊下にはこれまでの国家試験合格者の名前が貼り出されており、看護が 12 人、介護が 51 人であることが分かった。他にも留学生、日本企業社員の英語研修、日本語の先生の養成などの授業も開講している。現在は 10 人の日本語講師がおり、うち 2 人が日本人である。



(写真：日本行きを目指す介護や看護の技能実習生)

また、この施設には社員や生徒のための食堂が完備されている。50 ペソ（約 100 円）で食べ放題という驚きの安さである。充実した研修環境が整っているようだ。

施設見学後、隣接している中華料理店で軽食をいただいた。食事を楽しみながら、石川氏と日本語講師の女性 2 名から聞き取りを行った。以下では聞き取った内容をまとめたい。

施設案内をしてくださった石川哲哉氏は茨城県日立市出身の 44 歳。マニラ在住。17 歳の時、両親に「修行してきなさい」と言われてフィリピンに渡った。右も左も分からない中、観光ガイドの仕事をしてしながら数年過ごし、そのままマニラに定住した。山奥の建設業などのいくつかの仕事を転々として過ごし、前述のように 2007 年の PAD 財団の創設に携わった。

日本での就労を希望するフィリピン人に関して、学歴はそんなに高くない人が多いと話す。技能実習生は高卒でも応募できることもその理由のひとつであるという。高学歴の人はアメリカを就労先として希望することが多いそうだ。また、日本を選ぶ人は賃金が高いからというよりは文化面への興味関心によるところが大きいとか感じているという。特に最近はその傾向が強くなっているそうだ。

同財団では生徒たちが日本に渡った後の就労状況や職場の待遇の確認も行っている。石川氏が問題視しているのは、資格試験対策のための勉強時間を確保するなどの配慮が充分になされていない実態がみられることだという。本来は受け入れ先の職場が勉強時間を確保するようにすべきところを、現在は管理団体が請け負っている状態になっているという。

また、2018年の入管法改正によって創設された新在留資格「特定技能」に関しては、「様子見」の立場であると話す。特定技能は従来の制度とは異なり転職が可能なため、企業側も投資に慎重な姿勢をとっているという。

以下は、日本語教師であるロサンさんに聞き取った内容である。彼女のEPA介護士としての経験や渡日・帰国の経緯について主に記述する。

ロサンさんはフィリピンの田舎で長女として生まれた。現在20代後半で、兄弟はすでに結婚して家を出ている。看護学校を卒業した後すぐに偶然テレビCMでEPAについて知り、2011年にEPA介護福祉士候補生に応募した。この制度では日本で介護士として働くことになり、看護師としての仕事をするのは出来ないことを知っていたため、看護師として働くことを強く希望していた彼女は、本気で日本に行くつもりは全く無かったという。しかし結果は合格。4000人の応募から155人のEPA候補生に選ばれた。

フィリピンで6か月の日本語学習を経て、2013年に日本に渡った。渡日後6か月の日本語研修を終えて秋田県の病院で勤務を開始した。仕事は楽しいこともあったが、基本的には心身共に厳しいことがほとんどだった。仕事が無い日は介護福祉士の試験勉強を進めなければならず、ほとんど休む暇は無かった。「若いのだから経験を積みなさい」と仕事を押し付けてくる日本人の先輩職員との人間関係にも悩まされた。介護による腰痛もひどく、仕事に対するモチベーションは徐々に下がっていき、2年間頑張った資格試験の勉強もその後はやめてしまい、休みの日は一日中寝ているようになっていった。EPAの更新は希望せず、4年の契約終了を期に2017年フィリピンに帰国した。そのあと数か月間は旅行で各国を巡ったりして過ごしたという。

帰国後の就労先としては、看護師としてでは無く日本語を生かした仕事に就きたいと考えていた。そして昨年2018年に同財団の日本語講師募集を見つけた。早速履歴書を送り、面接を経て就職した。日本語を教えるのは想像以上に難しかった。特に学習意欲に波がある生徒にやる気を出させることがとても大変であるが、非常に重要な事だと話す。講師によってはタガログ語や英語を織り交ぜながら授業を進める人もいるそうだが、ロサンさんは意図的に日本語のみを使った授業展開をするように心掛けているという。生徒にも授業中は日本語以外の言語の使用を一切認めていない。日本語講師としての誇りと、生徒を育てる事へのやりがいを感じている様子が、彼女の言葉から感じられた。

参考資料

日刊まにら新聞 2006年3月12日

N. T. トータルケア株式会社 HP <https://www.nt-totalcare.com/company/> (2019年9月20日最終アクセス)



(写真：PAD 財団建物の前で)

*CFO 職員向けプレゼン 【執筆者：中原慧】

CFO の 14 名の職員に対して、学生から 5 分程度の日本に関するプレゼンテーションを行った。トピックは結婚移民の方々へ行ったものと同じである。



(写真：学生たちに質問する CFO 職員)



(写真：四季と日本文化について紹介)

多くの質問があがったのが中絶や避妊に関する報告に対してであった。フィリピンでは、現在でも中絶は禁止されており、2012 年の「Responsible Parenthood and

Reproductive Health Act of 2012」によって避妊目的の薬の使用が解禁された。このように、リプロダクティブヘルス・ライツに関する事柄は、日本とは大きく異なる状況にある。

法的には中絶が禁止されている一方、「midwives」(Center for Reproductive Rights 2010)と呼ばれる医師免許を持たない者による中絶が行われていると、CFO 職員が証言している。実際に、S. Singh ら(1997)の推計によると、15 から 49 歳の女性 1000 人当たり 20 から 30 件程度の中絶が行われており、年間では、約 4000 件が実施されている。法的な実態と現実的な人々の行動の間に乖離もある中で、フィリピン人女性の中には、中絶に対して、宗教的な立場などから中絶などの行為に前向きではない人もいる。そうした中では、リプロダクティブヘルス・ライツを自覚することは、フィリピン人女性の人権擁護の観点から重要である。

質問としては、出産を行う場所や相談を請け負うワンストップサービスの有無があがった。特に、国外での出産について、ワンストップサービスの存在は、妊婦の不安を軽減する一つの方策であると感じた。なぜならば、外国人の妊婦が抱える不安が多岐にわたることが指摘されており(橋本ら 2010)、その内容も一つの相談先で解消できるものではない。さらに、相談先が分からないという問題も外国人住民は抱えていることもあり、多くの相談先を個人で見つけることは困難である。その点からも、質問されたような妊娠・出産・育児に関わるワンストップサービスの設置は重要な課題である。

次に関心があったものとして修学旅行などの学校行事への参加についてである。特に参加しなかった場合、何らかの罰や成績上の不利益があるかについて質問があった。国外において、経済的に余裕のない場合もあり、その際には欠席も可能かという趣旨であった。日本における外国人住民向けの教育ガイダンスでは、基本的には参加することが原則として説明され、いかに資金を貯蓄するかということや、PTA 会費などを積み立てていることへの理解を求める内容が目立っている(長野県日本語を母語としない子どもと親のための高校進学ガイダンス資料 2019)。今回のプレゼンテーションでも同様の前提であった。

一方では、そもそも学校行事への参加に義務がないのであれば、経済的な負担をしてまで参加する必要を感じていない外国人の存在も、今回の質問からは示唆されている。仮に、彼らの子弟が参加しない場合に、成績上の不利益や学校生活上の不利益が生じないような対策を講じる必要があるだろう。

加えて、日常でのトラブルに対するワンストップサービスとして国際交流協会を提案し、それに対する質問として電話での対応をしているのかというものが出た。電話での対応は、基本的にどの協会もしているが、タガログ語への対応は大きな格差があるだろう。大阪の国際交流協会では、タガログ語を含めて 10 カ国近い言語に対応できる体制を整えているが、その他の協会では英語やポルトガル語など主要な言語のみの対応のところも多い。このような状況では、結婚移民とのピアカウンセリングで出会った方のよ

うに英語にも日本語にも不自由を抱える人々は排除されてしまうだろう。

また、相談件数に注目すると、外国人の多い大阪では年間 1600 件程度であるが、外国人の少ない長野県では 4000 件近くの相談を受けている。ここからは、外国人住民が相談できる環境には、言語的な環境以外にも、より多くの社会経済的環境の整備が必要であることを示唆している。



(写真：日本での相談窓口について議論の様子)

子ども食堂に関する報告に対しては、どのような団体が運営しているのかやなぜ日本では貧困問題が深刻化しているかについて質問がでた。フィリピンでも類似の活動が教会で行われている。一方で、相対的貧困の概念については、説明が必要であった。フィリピンにおける貧困とは、絶対的貧困を指しており、相対的貧困の問題性については、より議論を深める必要があった。日本において「普通」の生活を送り、子どもを持った場合には、「普通」の環境を提供することの大切さは、リアリティを持って伝える努力が必要であると感じた。一方で、日本国内でも、貧困で苦しむ高校生として紹介された人物への誹謗中傷など、未だ相対的貧困の問題についての理解は広まっていない。この問題も、外国人への説明に囚われず、共通した認識を構築していく必要がある。



(写真：子ども食堂について紹介)

一方で、質問が少なかったものは、日本における文化的な行事や学校制度の概略、自治会などの地域のコミュニティについてである。制度的な概略に対してよりも、具体的にどのようにそれらを活用できるのかや行事への不参加による不利益などに関心が集まっていた。今後は、各組織へのアクセス方法や行事やイベントへの参加の有無による不利益など、より生活の中で重要となる情報に焦点を当てた報告が望まれる。



(写真：日本の学校について紹介)



(写真：自治会について紹介)

参考資料

長野県国際交流協会「日本語を母語としない子どもと親への高校進学ガイダンス」

橋本秀実・伊藤薫・山路由実子・佐々木由香・村嶋正幸・柳澤理子，2010，「在日外国人女性 の日本での妊娠・出産・育児の困難とそれを乗り越える方略」『国際保健医療』 26 巻 4 号 281-293 頁.

Center for Reproductive Rights, 2010, “Facts on Abortion in the Philippines:

Criminalization and a General Ban on Abortion” Fact Sheet. Retrieved from

https://reproductiverights.org/sites/default/files/documents/pub_fac_philippines.pdf

Singh, S., Cabigon, J., Hossain, A., Kamal, H., & Perez, A., 1997. Estimating the Level of Abortion in the Philippines and Bangladesh. *International Family Planning Perspectives*, 23(3), 100-144. doi:10.2307/2950765

4日目：2019年8月29日(木)

*POEA 【執筆者：飯塚彩】

これまでの4日間の中で1番の早起きをして、海外雇用庁（POEA:Philippine Overseas Employment Administration）を訪問した。朝8時ごろに到着したが、既にたくさんの人々の出入りがありエレベーター周辺はごった返していて、「働くためにフィリピンを出る」ということが私の思っていた以上に大きな道であることに圧倒された。POEAは、海外に働きに出るフィリピン人（人口の10%を占める）の権利保護のため、短期労働者の勤務先の審査と斡旋、送り出し機関の審査・統括（1982年にPOEAに一元化されている）などを行っている。

前半は、会議室でPOEAの紹介ビデオを見たあとに職員さんがスライドを用いて説明して下さった。フィリピンはその労働人口に対して国内の仕事の数が不足していることから、国単位でも海外への出稼ぎを促進している。スライド内ではフィリピン人について、hardwork、dedicated、dependableなどポジティブな言葉をたくさん用いて自国民を外国にプロモーションする趣旨のパートもあり、世界2・3位の送り出し国としての力の入れ方が印象的だった。また、海外労働者の保護(Protection)としては、違法業者や職場での搾取の取り締まりに加え、労働者のフィリピンへの再統合(reintegration)に力を入れている。特に前者の取り締まりに関しては様々な部署が協力して川上から川下まで包括しており、国内の送り出し機関を束ね、ライセンス不所持業者の摘発を行っている。加えて、フィリピン人向けのオンライン窓口やオリエンテーションを設けることによっても、このような違法労働への従事の防止や対応を行おうとしている。



(写真：POEA でのレクチャー)

後半は、POEA のオフィスを見学させていただいた。様々な部署が各階に配置されており、利用者が各々窓口で足を運び、受付し順番待ちをしていた。その多くはガラス張りで誰でも中の様子が見られるようになっていて、日本の市役所とほとんど変わらない雰囲気だった。私たちは、その中でも adjudication（訴訟関連）、licensing system（送り出し機関の審査・登録）の部署の話を主に聞かせていただいた。



(写真：訴訟関連の窓口)



(写真：申請書を提出する人々)

どちらの部署も弁護士の方が多く出入りしていた。訴訟関連窓口では、各自がテンプレート書類に訴訟の内容を記入したものを持ってベンチで順番待ちをしており、かなり

システム化されていると感じた。Licensing system では、職員の方が忙しく電話対応やパソコン業務に追われており、話によると職員 1 人あたり 3 件程度の申請を担当し、その審査には大体 1 週間半程度かかるという。また、このように送り出し機関からの申請に対応する方だけでなく、認可済みあるいは申請のない送り出し機関で違法なものを見つけ出す職員の方のお話も聞くことができたが、どちらも送り出し機関の現状の不透明さには問題意識を強く持っていることがうかがえた。

*日本国大使館 【執筆者：中原慧】

安川さんは、日本では2005年の入省時より年金関連の業務に携わっており、フィリピンへ来る以前には、国際課に所属していた。在フィリピン日本大使館では、労働関係の窓口として、ビザの申請や両政府の仲介などを行っている。

当日は、各自が興味のある質問をし、安川さんが回答する形式で進められた。印象的なやり取りとしては、日本におけるフィリピン人の労働環境についてである。技能実習制度や留学生ビザでの長時間労働など、多くの問題が日本で働く（技能実習については労働と認識していない）外国人に生じているが、特にフィリピン人に関しては、その弊害が少ないと認識していた。その理由として、POLO（Philippine Overseas Labor Office）が東京にあり、また、渡航に際しても、POLOを通じて企業との面談や給与明細の確認など、厳しい対応がとられていることを示していた。現在の特定技能のビザ承認についても、フィリピン政府から厳しい要求があり、中々進んでいないことも、その認識の背景にあると推察される。

一方で、留学生ビザで入国し長時間労働を強いられていることに関して、複数の就労場所がある場合にはどのような対応が可能か、という質問に対して、具体的な対応をとることが難しいと回答していた。仮に、2か所で就労していた場合に、どちらの就労場所で週28時間の基準を超えたかと判断するのか、また、雇用主がそのことを認識しているか等、課題が多いからである。加えて、このような問題は、先述のようにフィリピン人ではなく、それ以外の国の人々の問題であるとの認識であった。この背景には、フィリピン人は英語を扱うことができ、日本への留学が選択肢としてあがらないと述べていた。加えて、留学生の担当は文部科学省であり、厚生労働省の管轄ではないことも、対応できない理由であるとしていた。

また、日立製作所におけるフィリピン人技能実習生が契約書と異なる業務を強いられていた問題では、厚生労働省が業務の改善命令を出す予定と報道されているが（中国新聞2019年9月5日）、その問題が発覚した経緯などについては掘り下げようと思ったがなかなかお答えいただけなかった。

次に、安川さんからの質問として、現在の日本には何が必要であり、どのようにすれば達成できるのかというものが出た。基本的には、各人の関心に基つき理想とする社会像や人々の関係を述べた上で、安川さんから必要となる行動や措置をどのように実施していくかなどを質問され、議論を展開していた。

参考資料

中国新聞2019年9月5日「日立に改善命令か 技能実習疑い」



(写真：日本国大使館にて)

*Philippine Normal University 【執筆者：金城琴音】

最初にパワーポイントで Philippine Normal University の説明を受けた。

Philippine Normal University (PNU) は 1901 年に設立された国立大学であり、メインのキャンパスはマニラの中心地にある。大学設立当初は先生を輩出する規範教育に 2 年間の中等教育過程を用意しており、1949 年以降に理学部、家政婦学課程を有するようになり 1953 年に大学院を設置するに至った。PNU はキャンパスの刷新を絶え間なく繰り返しコースの充実度を上げ、フィリピンの教職領域で大いなる評価を受け教育という分野の地位を確立した。その功績から「教師教育の中心地」と呼ばれるようになった。宗教はカトリックで、2015 年現在総学生数は 6000 人にのぼる。大学・大学院・博士課程それぞれに多様な種類のコースが存在しているが、その分野のみに特化するカリキュラムではなく、その分野とそれに関連する分野のコースをうまく組み合わせたカリキュラムとなっている。PNU に短期留学している日本人大学生 2 人の紹介も受けた。

説明の後には職員の Carloさんと共に PNU 内部を散策した。キャンパス内は広く、小学生くらいの子どもたちが校庭でバレーボールをしていたり、高校生くらいの女の子たちが花壇で雑談をしたりしていた。制服は、女の子は上下とも白色で膝下ほどの長さのスカートを履き、男の子は上は女の子と同じ白色のシャツで、下は黒色の長ズボンだった。首から学生証のようなものをぶら下げていた。2019 年 8 月 29 日現在 PNU のキャンパスで改装工事が行われていた。大学内には寮があり、そこに暮らす学生も多いらしい。キャンパス内にある図書館や教会を回った後、Carloさんの生徒たちと共に校庭近くの大きな木の下で写真を撮った。みんな笑顔で私たちが歓迎してくれている様子で、「フィリピンを楽しんで！」と言ってくれた。



(写真：PNUの学生たちと)

5 日目：2019 年 8 月 30 日(金)

*Malacanang 【執筆者：飯塚彩】

今回私たちは、マラカニアン宮殿の一部であるマラカニアン博物館内を回る 30 人規模程度のガイドツアーに参加した。

まず初めに、Freedom Hall でのガイドの Rui さんによるマラカニアン宮殿の歴史についての紹介があった。マラカニアン宮殿は、スペイン人貴族 Luis Rocha の別荘として建設された宮殿である。Malacanang という名前の由来は諸説あるといい、“may”(ones) “lakan”(powerful) “diyan”(there) という 3 単語を繋げたものという一説が紹介された。19 世紀の間スペイン総督の別荘として使用され、アメリカ植民地時代にはその管理下となり、その後 1935 年から現在にかけてはフィリピン大統領の官邸として使用されている。中でも第 10 代大統領のフェルディナンド・マルコスは、様々な豪華なイベントをここで開催した。

その後、建物内の 8 つの部屋を歩いて回った。1 つめの部屋は旧待合室で、重厚な造りの部屋に、歴代の大統領と候補者に加え、俳優のポスターや関連品がぎっしりと貼られていた。2 つめの部屋は旧総督官邸、3 つめは会議室であった。ドゥテルテ大統領が、宮殿の外で活動していた活動家（ドゥテルテの指示グループ）を招いてここで会食をしたというエピソードがあった。次にケソン元大統領事務室を見学したが、その廊下にはマラカニアン宮殿がケソン大統領時代に増築した際の写真が展示されていた。フィリピンが独立の能力があることを世界に発信するために大規模な増改築が行われたという。その後に案内された部屋はキリノ元大統領評議室であった。キリノ元大統領が就任した記念の部屋である。

ここで、それまで陽気に館内をガイドしてくれていた Rui さんは口調を改め、第二次世界大戦期のフィリピンの苦難の歴史についてのレクチャーを始めた。キリノは貧しい家族に生まれたものの学業において非常に優秀であったこと、小学校の先生の仕事を経て上院議員に就任するが、マニラ市街戦の際、日本兵に自身の親族 9 人（妻子も含まれる）を殺された。家族が殺された時の詳細の様子を Rui さんが語った時、緊迫感の流れる部屋にいた参加者たち（主にフィリピン人）はその残虐さに耐えられず小さく悲鳴を上げるものが多かった。しかしその後大統領となったキリノ氏は、（キリスト教の教えにも則ったという）日本と国交を回復し、個人的にも国家的にも日本をゆるすということを表示、“Japan is best friend.”という言葉を残した。私たちがいた部屋には、その決断を綴った実筆の一枚の紙が飾られていた。参加者たちはその額縁を近くで見ようとその日一番の人だかりができており、どれだけ語りに引きこまれていたかがうかがえた。

ツアー参加者のなかに日本人は私達のグループだけであったが、Rui さんは「これから日本の皆さんにとって聞くのが苦しい話をするが、フィリピンにとってとても大切な話であるとともに、これは決して悪い結末で終わる話ではないから理解してほしい」という旨を丁寧に前置きしてくれていた。当時の日本人の非道なエピソードがあっても、私たちの居心地が悪くならないように、周りの参加客の気分が悪くならないように、気を遣ってくれたのだと思い、とても感謝の気持ちでいっぱいになった。

その後は歴代大統領夫人の肖像画やドレスなどが展示された資料室などを見学し、ツアーが終了した。



(写真：マニラ市街戦の様子を話す Rui さん。重く緊迫した空気が流れる。)



(写真：たまたま一緒になったツアーの参加者との写真撮影)

*Batis Center【執筆者：松岡萌映】

日本で働くフィリピン人女性や JFC の支援を行う NGO である Batis Center を訪ねた。Batis Center は 1988 年に設立されてから、日本にエンターテイナーとして働きに行ったフィリピン人女性に対する支援を中心に活動を行ってきた。最近では日本だけでなく中東をはじめとする他の外国に働きに行くフィリピン人女性の支援にも携わっている。主なプログラムとして、日本で働いたあとにフィリピンに戻ってくる女性に対するカウンセリングや健康面でのサポートなどを行う。また、彼女たちに対するエンパワーメントのプログラムもある。帰国した女性だけではなく、これから日本に働きに行く女性たちの被害を未然に防ぐためのプログラムもある。さらに、日本人の父親から見捨てられてしまった JFC の子どもたちについて、法的な側面と心理社会的な側面の両方からサポートを行う。心理社会的な側面では、子どもたちが自らのアイデンティティを構築するための支援を実施する。また、日本を知らない JFC たちが日本について学べるプログラムも提供している。N5 レベルの日本語を学ぶこともできる。

今回、JFC として生まれたときから Batis Center に関わっている、アオイさん(仮名)にお話を聞くことができた。アオイさんの母はエンターテイナーとして日本で働き、そのときにアオイさんの父親と出会った。また、アオイさんには同じく JFC である異父姉がいる。アオイさんの母はアオイさんが 9 歳のときに、父は 13 歳のときに亡くなっている。アオイさんの父親は生前、アオイさんと頻りに連絡をとったりフィリピンを訪れたりするなどして良好な関係を保っていた。異父姉の父親とは当時連絡がついていなかったため、アオイさんの父親が異父姉のことも気にかけていたという。アオイさんの父親が亡くなったあと、異父姉の父親と連絡がつくようになり、現在では彼が異父姉とアオイさんの両方と連絡をとるなどして良好な関係を築いている。このように日本人の父親と比較的良好な関係でいられるのは、JFC の中では珍しいケースだという。

アオイさんは日本の企業に就職して働き始めてから 9 ヶ月が経ったところで、現在は約 1 ヶ月の休暇をとってフィリピンに帰国中だった。JFC にとって、日本でホワイトカラーの職を得ることは困難なことであるため、ロールモデルのような存在になっている。しかし、日本の企業で働くことには様々な困難がついてまわる。特に言語の問題は大きい。アオイさんの働く企業では、就職前に社内では主に英語を使用すると伝えられていたにも関わらず、実情は日本語を使用する場合がほとんどであったという。少なくとも就職の際に提示された条件と実情が異なるというのは大きな問題であるし、アオイさんのように日本語があまりわからない人を採用する以上一定の配慮は必要であることは言うまでもない。また、他の社員が「名字+さん」で呼ばれるのに対して、アオイさんだけ「あおいちゃん」と呼ばれることに違和感を覚えるという。さらに、アオイさんが自分の結婚について言及したときには、上司に「子どもを産むならその前になにか大きな成果を残さないと昇進できなくなる」とプレッシャーをかけられたという。これらは女性や外国人に対する差別的意識の問題であると思った。職場での「違和感」は、例えば

飲み会のときには仲が良いように見えるのに職場ではよそよそしく振る舞う様子や、アオイさんが職場に結婚指輪をして行っても誰もそれについて触れないことなど、日常的に感じているという。慣れ親しんだ環境から新しい環境に移動するときには困難がつきものであり、それは JFC に限ったことではない。アオイさんが感じた「違和感」は、外国人や女性に対する差別に関わる重要な問題である場合があり、これらは個人の意識の中だけではなく制度の中で改善していかなければならないことでもある。一方で、その違和感がフィリピンの文化と日本の文化の差であり、ある程度は適応したり納得したりしなければいけない場合もあると感じた。これらの問題は、個人の意識の中でお互いに歩み寄ることや、上記のような重要な問題が解決されることで軽減される可能性があると思った。

また、JFC のアイデンティティ形成についてもお話を聞くことができた。JFC はフィリピン人であると同時に日本人にでもあるという意識を強く持っている場合が多いという。アオイさんは日本に初めて来て日本人から日本語で話しかけられたとき、自分の居場所はここにもあったということ強く実感して涙が出たという。JFC が日本人の父親に会おうとすることは、自らのアイデンティティを構築するために必要なプロセスでもある。日本人の父親は JFC を見捨てたりぞんざいに扱うことも多く、そのような父親を探したり会おうとしたりすることで傷つく JFC も多い。それでも父親に会ったときには「満足感」を感じる子どもたちが多いのは、父親が彼らのアイデンティティの一部として存在するからであるといえる。フィリピンでは、家族のつながりがとりわけ重要視されていることも関係しているかもしれない。

JFC はステレオタイプ化された見方をされることも多い。日本人からは「ジャパゆきさん」の子どもたちとして見られ、フィリピン人からは裕福な日本人の子どもとして見られる。Batis Center の事務局長である Rose さんによる説明では、JFC の子どもたちには、このように社会が構築するステレオタイプを超えたアイデンティティがひとりひとりにあることを理解させるようにしているという。



(写真：団欒の様子)



(写真：ロラたちにマッサージされる今岡さん)



(写真 : Batis Center にて)

*Asian Center UP Diliman 【執筆者：本間桃里】

フィリピン大学 Asian Center の Jocelyn 先生の Globalization and Society in East Asia という授業に参加させていただいた。この授業では東アジアのグローバリゼーションや社会文化的な問題について扱っている。フィリピン大学の大学院生が 6 人ほど来ていた。韓国語や日本語を習っている学生もいた。Jocelyn 先生 は移民に関する先行研究がシティズンシップやアイデンティティのことなどに偏りがあると感じたことから、移住パターンが変化することを踏まえて、よりポジティブなナラティブを研究されている。安里先生は、東アジアには ASEAN や EU のような regional framework がないことを指摘し、最近の日韓の関係も含め、東アジアがフィリピンという第三者の目からどのように見えるのか教えてほしいと話した。

最初の話題は、日韓の外交およびフィリピンの立場についてだった。外交がミクロレベルでどのように影響するかが授業の一つのテーマであるため、日韓の関係が悪化するなか、私達に韓国製品をそれでも買うか、との質問が投げかけられた。日本では多くの若者は K-pop であつたり韓国のコスメであつたり韓国の文化や商品の消費者であり、それを突然やめることはできないという意見を出した。フィリピンの場合は中国の製品を多く輸入している（スマートフォンも Apple より中国製品が圧倒的に多い）。しかし中国との領土問題もあり、多くのフィリピン人は中国政府を支持するような政策には反対している。特に昨日中国・フィリピン間で決められた東シナ海でのエネルギー共同開発の合意も行方が不安だと言っていた。また、中国ではオンラインのギャンブルは違法であるが、フィリピンの POGOS というオンラインのカジノ産業が中国人客をターゲットにし、2017 年頃から約 200,000 人に昇る中国人労働者が違法にフィリピンで就労していることも懸念として挙げられた。フィリピンと中国の関係によって中国系フィリピン人の人々に影響があるかという質問に対しては、影響はあまりないと言っていた。日本だと日韓の関係が悪化するとヘイトスピーチなど非難の対象になってしまうのは在日韓国人の人々であるため、その違いがどこにあるのか気になった。

次に香港の話題になった。香港に住む人は自身を中国人だとは思っていない。香港と同様、特別行政区であるマカオはどうなのだろうかという疑問が出た。あるフィリピン大学の学生はデモが起こる前に香港を訪れたそうだが、ツアーガイドが中国本土に対してもものすごく攻撃的な言葉を発していたことが印象的だったと言う。また、中国本土から出産をするために香港に来る女性が多くいるそうだが、香港がそのような女性に対して制限をかけたこともどうなのかとの意見があつた。香港がかれらの権利を守ろうとしているのと同時に、台湾で起こっていることも心配だとの声がフィリピン大学学生からあつた。もし台湾が中国本土に吸収されると、今度は台湾が日本を植民地にしてしまうかもしれないから嫌だと話していた。日本は台湾を植民地支配していたにも関わらず、フィリピンから見ても今の日本と台湾の関係は比較的良好だと言っていた。

そして日比の関係の話題になった。日比の関係は全体的には良好である。特に JICA からの経済支援が好印象であるようだ。ただ、ダムプロジェクトが先住民の生活を脅かしていることは心配だと話した。あるフィリピン大学学生は、日本からの経済支援や商品には感謝をしているが、同時に第二次世界大戦時に起こったことは忘れられないと話していた。明仁天皇が 2016 年にフィリピンを訪問し、第二次世界大戦で亡くなったフィリピン人に対して追悼の言葉を述べたことにも触れた。他の学生は日本が教育に関わる奨学金を支給していることや、フィリピン人の雇用を生んでいることに感謝をしていると話していた。

さらに、フィリピン大学学生からの質問で、京アニの事件についてどう思うか問われた。日本だけでなく世界各国から追悼の言葉があったことは驚いたこと、アニメが平和構築の一つの手段にもなりうることなどを話した。

安倍政権についてどう思うかという質問もきた。京大の学生は、安倍政権反対派と、好きでも嫌いでもないという意見の両方があった。反対派は、安倍政権が傲慢であることや、保守的に見せようとして実はネオリベラルな側面があること、教育にお金を使わず何でもボランティア任せにすること等が挙げられた。好きでも嫌いでもないというのは、安倍首相に代わる人がいないから仕方がない、という意見だ。フィリピン大学の学生は安倍政権に反対しているようだったが、他に首相になる人がいないことに対して残念だと言っていた。

最後に、京大学生から、フィリピンと日本の共通点は何かという問いが出た。両国とも島国であること、アメリカの文化の影響を大きく受けていること、アメリカと同盟国であること、年上を尊敬していること、ナショナリズムが強いこと、安倍政権やドゥテルテ政権に歯向かえないこと、家族イデオロギーが強いこと、働き者なところ等が挙げられた。共通点より違いの方が大きいという意見もあった。

アジア研究の論文をお土産でいただき、集合写真をとり、授業が終わった。フィリピン大学の学生と様々な話題をディスカッションできるのはとても貴重で刺激的な機会だった。私の勉強不足で学生たちの意見を正確に理解できたか不安な部分もあるが、学生が意見を持ちとてもアクティブに発言していたことが印象的だった。また、日本とフィリピンとの関係について聞かれたときに、フィリピンの学生が日本の文化を含め、政治など日本の色々なことを知ってくれていたのに驚いた。私達はフィリピンについて多くを知らないことに、非対称性を感じてしまった。互いの政治経済状況や外交が、互いの生活に密接に影響し合っていることにもっと意識的になり、価値観や文化などのソフト面も含めて、フィリピンのことを学びたいと思った。



(写真：フィリピン大学の学生とのディスカッションの様子)



(写真：Jocelyn 先生の講義の受講生とともに)

6 日目： 2019 年 8 月 31 日 (土)

*Farming 【執筆者：松岡萌映】



(写真：農業体験の様子)

GK Enchanted farm とは、Gawad Kalinga というフィリピンの NGO が運営する農場や大学、村落（コミュニティ）などを抱えるプラットフォームである。広い敷地内には企業やレストラン、売店や語学学校などさまざまな施設がある。私たちはまず農業体験を行った。畑を掘り起こして盛土をつくっていく作業だったが、粘土質の土が固くて重く、なかなかうまくいかなかった。農場ではレモングラスなどのハーブやパイナップル、エディブルフラワーなどが育てられていた。農業体験後にレストランで朝食をいただいた。

それからスタッフの方のお話を聞き、敷地内の見学を行った。今年の春からここでインターンをしている東洋大学のひなのさんにもお話を聞くことができた。ひなのさんは farm 内にある「Palette school」という語学学校で英語を学んだ後、経営面でのインターンシップに参加している。語学学校の先生は貧困層の人々を雇用しているという。

GK Enchanted farm は、貧困撲滅のために社会起業家を育てること・現地農家を助けること・地方を活性化させることを目的とした組織であり、そのために様々な施設を運営している。貧困層のためのコミュニティ「The heart and soul of the place」はその代表例である。このコミュニティには 50 もの住居が立ち並んでおりひとつの村落として成立している。コミュニティ内の家は、もともと自分の住居を持つことができなかった 300 名もの貧しい人々に無償で提供されている。このコミュニティに住む条件は永続的

な住所を持たないことと収入が月 10000 ペソ以下であることである。GK ではこの対象者向けにオリエンテーションを実施し、コミュニティに住む人たちを集めている。住居は「Bayanihan spirit（相互扶助）」の考えのもと、入居者たちの共同作業で建設されている。コミュニティ内では子どもたちが遊んでいる光景も目にした。住居の外にはバイクや自転車なども停められており、人々がここで安全で安定した生活を送っている様子が垣間見えた。



(写真：敷地内で生活する人々)

施設内にある大学「SEED」では、社会起業家を育てる教育を無償で提供する。社会企業（Social enterprise）とは、ビジネスとして自らの儲けを出しながら社会貢献も行う企業のことである。生徒たちは2年間で人格形成、企業マネジメント、コミュニケーション、ビジネス数学、農業などを学び、その後社会企業の起業家となることを目指す。

敷地内には、SEED 出身者をはじめとするコミュニティ内の人々のアイデアから生まれた社会企業や、GK とパートナーシップを提携している社会企業が多く存在する。これらの企業はコミュニティ内外から貧困層の人々を雇用している。フィリピン特有の農産物を使用した食品を開発する企業が多く、レモングラスやスイートポテトを使ったジュースを生産する「Bayani Brew」、ピーナッツスプレッドなどを生産する「First Harvest」などがある。私たちも朝食でこのピーナッツスプレッドをいただいた。また、コミュニティ内外の女性たちが製作した人形を販売する「Plush & Play」や、自然素材のストールやボウタイなどの織物製品を企業向けに生産する「Erisilk Ambension」などもある。

GK Enchanted farm では、2024 年までに 500 万家庭をコミュニティに住まわせること、50 万人の社会起業家を育てることを目標に活動を行っている。

最後に売店で farm 内の社会企業で生産された商品を購入した。私は微力ながら応援する気持ちで「First Harvest」の「Salted coco caramel」を購入したが本当に美味しかった。確かな目的のもと設立された企業の良い商品がこれからもっと広がってほしいと思った。



(写真：授業を受ける学生たち)

***DAWN 【執筆者：本間桃里】**

まず、NGO 団体 DAWN (Development Action for Women Network) が出版する『フィリピン女性エンターテイナーの夢と現実：マニラ、そして東京に生きる』(2003) から DAWN についての紹介を抜粋する。DAWN はフィリピン女性エンターテイナーとその子どもたちであるジャパニーズ・フィリピーノ・チルドレン (JFC) の権利擁護を目指して活動している NGO である (DAWN 2003: 4)。女性と子どもたちへのカウンセリングや法的支援、女性のための自立支援プログラム、調査研究活動、女性問題や移住労働問題についてのアドボカシー活動や他の団体とのネットワーキングなどの活動に取り組んでいる (DAWN 2003:4)。フィリピン移住労働者権利ウォッチ (Philippine Migrants Rights Watch: PMRW)、海外フィリピン人労働者 (OFW) ジャーナリズム協会 (OFW Journalism Consortium)、女性の人身売買に反対するアジア太平洋連合 (Coalition Against Trafficking in Women: CATW)、海外フィリピン人労働者再統合協議会 (Philippine Council on OFW Reintegration) といった団体と協力して活動を行っている (DAWN 2003: 4)。毎年京都大学にも、代表の Carmelita さん (以下、メルさん) が率いる「劇団あけぼの」の 6、7 名ほどの子どもたちが “Crane Dog” の劇を公演しに来てくれる。鶴と犬の間に生まれて、自分のアイデンティティに葛藤する様子が描かれた作品だ。JFC の子どもたちの境遇と気持ちが作品に表現されている。

私達が DAWN に着くと、子どもたちが集まって勉強会のようなことをしていた。なかには今年日本に劇をしにきてくれた子どもたちもいた。メルさんのオフィスに入ると、フェリス女学院大学の小々谷先生もいらした。私がお会いするのは名古屋でのフィリピン研究会以来だった。また、DAWN で日本語を教えているという高校生も来ていた。日本人としてフィリピンで生まれ育ち、高校はシンガポールのインターナショナルスクールに通っているらしい。丸い席に着くと、一人一人にあらかじめ用意されたネームシールを配って下さった。とうもろこしの入ったマフィンとコーヒーも出して下さった。自己紹介を終えると、メルさんから、NHK のドキュメンタリーについての感想を聞かれた。7月31日(水)と8月7日(水)にEテレのハートネットTVで『母が愛したニッポンへ〜フィリピン人エンターテイナーの子ら〜』が放送された。以下は学生から挙げられた感想である。

・M ちゃんがやっとお父さんに会えたのに、お父さんの経済的な理由で日本に呼び寄せることができないのは辛いと思った。

・M ちゃんのお父さんの日本での経済状況が苦しいため、「フィリピンに住むことも考えた」と言っていた。これまで父親がフィリピンで子どもたちと一緒に住むことになったケースはあるのだろうか。→ いくつかある。

・E君がお父さんに会えなかったことに心が痛んだ。電話越しでお父さんが通訳の方に怒っていて、それをE君が悪いのではないとメルさんが慰めていたことが辛かった。→ドキュメンタリーでは、E君はお父さんに会うのを諦めたというように描かれていたが、今回DAWNで学生が直接E君と話すと、E君はまだ諦めていないと言っていたという。

・自分はお父さんに会えていない子どもたちが、Mちゃんがお父さんに会えたことを喜んでいたので、複雑だろうと思う。

・お母さんが元エンターテイナーで、JFCのAさん。子どもと映っていたが、Aさんは結婚している？→シングルマザー。相手の男性は日本人。

ドキュメンタリーの話の他には、現在の興行ビザについてのお話があった。現在興行ビザを得るには2年の経験が求められ、かつ3ヶ月で更新となっている。それで月5万円ほどしか手に入らない。どう考えてもおかしい。今回私達がフィリピンで行ったパブで一番高いお給料をもらっている人は月140,000ペソだった。つまり、彼女からすると日本は出稼ぎ国としてそこまで魅力的に見えない。

また、最近ではDAWNの子どもたちに対して大使館が特別扱いしないとメルさんが愚痴をはいていた。これまでは直接ビザを発給していたが、最近では代理店を通して申請しなければいけなくなった。興行ビザの問題の風化だといえる。



(写真：メルさんとのディスカッション)

話が一段落すると、機織り機やミシンなどが置いてあるSIKHAYのお部屋を見せていただいた。部屋では子どもたちのお母さんが6名ほどおしゃべりをしていた。SIKHAYはDAWNの女性エンパワメントプログラムの一つで、女性が技術を身につけ、

ペンケースやお財布、スカーフなど色々なものを手作りし商品として売る。SIKHAY は work と life が組合わさった言葉だ。何人かは山淵さんや私のことを覚えてくれていた。劇で犬のお母さん役を務めたミチにそっくりのお母さんが SIKHAY の商品を見せてくださった。私はちょうどパソコンのケースがボロボロで新しい物が欲しかったので、パソコンケースを見せてもらった。“I made this. This is the only one in the world.” と薦めてくれたケースの生地はとてもしっかりしていて、キラキラのビーズもついていて素敵だと思った。私はパソコンケースを買ったが、他の学生は化粧ポーチなど各自好きなものを買っていた。織物だけでなく、しいたけチップスも売っていた。美味しいから食べてみて！と言われ、しいたけ苦手…と思いつつも食べてみると美味しかった。



(写真：エンパワメントプログラムを受ける女性たちとの交流)

子どもたちも大人もみんな円になり、自己紹介タイムになった。子どもたちが日本語で名前と年齢と趣味を話してくれた。日本だと英語で自己紹介をするのを恥ずかしがる中高生は多いと思うが、勉強している日本語を使って堂々と自己紹介をされていてすごいと思った。お母さんも子どもたちもとても明るかった。N君のお誕生日で、みんなでおめでどう〜とお祝いした。自己紹介のあとは自由タイムで、各々がおしゃべりしたり写真を撮ったり好きな時間を過ごした。Mちゃんは日本に来ていたときは大人しいイメージだったが、今回は向こうからも話しかけてくれて嬉しかった。「来年も日本に来るの？」と聞くと、劇のオーディションがあるからまだ分からないとのことだった。メルさんいわく、Mちゃんはお父さんに会えて少し明るくなったという。

中学校で英語の先生をしているSちゃんともお話した。クラスにADHDの子どもがいて、対応に悪戦苦闘していると言う。その学校では、ADHDの子どもも同じ教室で授業を受けているらしい。その子だけ別だと孤立してしまうからだと言っていた。歩き回る子どもでも参加しやすいようなゲームを取り入れるなどして授業を工夫しているそうだ。また、周りの子どもたちもその子どもがADHDであることを知っている。日本

だと公に子どもたちに話さない学校が多いと感じるが、「他の子どもたちは障害のことを理解している」と言う。日本でも ADHD の子どもへの対応が課題になっていて、特に文化的なものなのか障害なのか、JFC の場合は判断が難しいということをお話すと、フィリピンでもボーダーの子どもがいると話していた。なお、外国人の子どもが発達障害だとされる構築過程は、金(2020)を参照されたい。

別れ惜しかったが時間になったので全員で写真を撮ってからお別れした。こうしてフィリピンと日本の両方で会える友達がいるのはとても嬉しいことだと身にしみて感じた。お父さんに会える子、会えて気持ちが晴れる子、会えても気持ちが晴れない子、会うのが難しい子、お父さんが見つからない子、みんなそれぞれ境遇は違うし、お父さんへの気持ちや関係も時間が経過するにつれ変化していくかもしれないが、この DAWN がそんな子どもたちにとってのホームになっているのだと感じた。私も今後も子どもたちのことを見守っていきたいと思った。



(写真：DAWN の子どもたちと女性たち)

参考資料

金春喜, 2020, 『「発達障害」とされる外国人の子どもたち—フィリピンから来日したきょうだいをめぐり、10人の大人たちの語り』明石書店.

DAWN, 2003, *Pains and Gains: A Study of Overseas Performing Artists in Japan from Pre-departure to Reintegration*, (=2005, DAWN-JAPAN eds., 『フィリピン女性エンターテイナーの夢と現実』明石書房).

*リフレクション 【執筆者：飯塚彩】

★テーマ：最も印象に残ったこと、人

今岡：

BATIS で話を聞いていて、JFC が過去の話でないことを実感した。

松岡：

BATIS。アオイさんの楽天の話を通して、日本人にとっての問題でもあること（セクハラや働き方など）を解決していかないと、当然外国人にとっても生きていきにくいと感じた。反対に、結婚指輪を指摘されなかった件についてはたまたまかもしれないし、気にし過ぎないことも必要なのではないかと思った。

中原：

アオイさんの話に関連して。給与の上がり方の話とか、女性を不利におくことでうまく利用する構造は日本にもフィリピンにもあるのだと感じた。女性を動きにくくする、依存させる環境が問題だと感じた。

金城：

中原さんと同じく、女性の給与が上がらないと行った問題は自分自身にとっても身近な問題で、アオイさんの場合外国人であることも加わって、困難な状況に置かれているのだと思った。また、彼女だけちゃん付けをしていたというようなことは、上司に悪気がなかったとしても、彼女にとっては見下されているように感じたことが問題なので、もし自分が外国人を迎えることになった際には気をつけなければいけないと思った。

本間：

結婚移民のインタビューでの印象が去年とかなり異なったことが印象的だった。去年は、移民女性に対して「被害者」のようなイメージを持つようなインタビューで違和感を持っていた。しかし、その際の女性とFBで繋がっていて今でも投稿を見ていると幸せそうに見えたり、今回のインタビューを聞いたりすることを通して、「上手くいくのかもしれない」というポジティブな見方をすることがあった。今回も年齢差が大きいカップルが大きく違和感を感じたが、そもそも理想の結婚とは何なのかという価値観は今までの経験で醸成されてきたものなので、一概に幸せ・不幸せと判断することはできないと感じた。

中原：

偽装結婚など。

山淵：

私たちが年齢を気にし過ぎていた？

松岡：

年齢もそうだけど、コミュニケーションの壁を心配した。グーグル翻訳で会話している人もいたが、それが本当にコミュニケーションと呼べるのかと違和感を持った。

今岡：

今現在では幸せに見えてもこれからも幸せであり続けるのかと気にかかった。当初は壁を乗り越えられると思っていても、壁は壁だし、結婚・出産というのは簡単にリセットできない難しいことだから、結婚後これからどのような問題が起こっていくのかということをお互いきちんと考えてから行動するべきなのではないかと思った。語学学校の人

も言っていたが、結婚移民の女性は、子育てなどのことよりも自分のことばかり考えてしまう傾向にあって、より包括的に結婚を考える必要があるのではないかと思った。

中原：

本間さんの去年のインタビューの成功例のカップルはコミュニケーション取れる方だった？

本間：

今年よりは。

じゃあみんな今回のインタビュー相手に関しては結構不安が残った？

安里：

だとしてもそれは止められることではない。個人的な問題なのか社会的な問題なのか？

中原：

ロマンティックラブであるかそうでないか自体が問題ではないかも。

松岡：

あのインタビューにおいては、写真を見せてくれる様子などを見ていると、それだけを見ていれば幸せそうなので止められないかなあと。

安里：

相手の男性は、どういった身分か商業婚ではわからない。ブルーカラーの50・60代の独身男性で、DV癖があるかもしれないし日雇いかもしれない。それを補填するのがCFOのカウンセリングだったりするわけだけど、どれぐらいの足しになるのかはわからない。

本間：

政府の見解としては、日本は比較的安心。

安里：

韓国はこれをきっかけに多文化共生政策を進めた。韓国は人口政策と国際結婚を結びつけて考えているので、このような疑問が投げかけられるのは不思議ではないと思う。

今岡：

フィリピン政府が渡航を促進しているのは、フィリピンへの送金を期待しているからだと思う。一方韓国は？

安里：

何をもって女性のempowermentととるか？

今岡：

日本政府が移民をきちんと支援できているかという点とまだまだ、もっとパブリックセクターを強化するべきだと思う。上下の隔たりがどんどん大きくなってしまふ。

飯塚：

今の日本の国民感情としての移民を受け入れ馴染ませる準備がないのかも。

中原：

社会的な調和という話に関しては、「いつか帰る・短期間で帰っていく」という意識が根底にあると思う。

本間：

それに加えて、大使館（国よりもミクロで人に近い機関）の対応が担当者による属人的であることがよくないと思った。

中原：

逆にやる気がある人が来ればどうにかなるということですか？ マニュアルは？

安里：

そういうことだと思う。ただマニュアルは必要？

中原：

最低限の知識として。

飯塚：

マニュアルとは？

本間：

前提知識と引き継ぎかな。対応をマニュアル化するのは難しい。知見を途切れ途切れにしてしまわないようにするための対策。

安里：

京都市に100人の結婚移民女性がいたとして、初婚を通してのいるのは5人ぐらい。他は死別や逃走など。それは外国人だからか、それとも元々問題ある人が結婚を選んだからなのか。

松岡：

フィリピンでは離婚ができないということが知られていなくて、このような問題があるのではないかな？

安里：

外国で結婚したのに離婚できないというのはまずおかしい。しかしこれには利権が関わっている。

松岡：

世界が違うと感じる。

本間：

CFOによると、中絶に関しては禁止にも関わらず不法に中絶する人がいる。

松岡：

産みたくないけど中絶禁止だからしないのか、それとも中絶はいけないものという信念を持っているのか。

一同：

うーん。

山淵：

パブの女性は、「結婚はしたくないけど中絶はしないで産む」人がいた。だからそういう意識（避妊文化を認めない）があるのかな。それとも認識していないのか？

本間：

カトリックでは、結婚するまで性交渉をしてはいけないことを徹底している国もある。

安里：

フィリピンにもそういう人もいる。

山淵：

（話を戻すと）今回一番印象に残った人はあおいちゃん。JFCにも関わらず、自力で日本で生きていく道を開拓した初めて出会った人。しかしよく話を聞くと、セクハラや過

劣、精神的に不安定になっている状況などを聞きショックだった。他の JFC に対し、新しい生き方を提示してくれている一方で、「楽天落ちたハナさんはラッキーだったね」と言わせてしまう日本社会に危機感をもった。日本でこんなもんだよねとまとめてしまうこと自体も問題。JFC が日本で働くということは特殊なこと (no1 option) で、そうなるのはやるせなさを感じた。

中原：

本人は他の JFC に対するプレッシャーを感じていると思う。京都市立中学校の〇〇先生が話してくれていた△ちゃんの話でもそうだが、ロールモデルであらねばならないという意識が負担だろうと感じた。

飯塚：

その話の前置きとして、「これは軽微な話で騒ぎ立てるほどのことではないんだけど」と言っていたことが引っかかった。

今岡：

JFC の子達が、日本のことを知ったり日本人のアイデンティティを保てるようにしていると BATIS で話していたが、このような辛い話を聞くにつけ、やはり彼らのアイデンティティはフィリピンにあるんだなと感じた。

山淵：

その原因は日本にあるんだなと思う。

松岡：

いろんな問題を「そういう文化だから」と隠してしまっているということに関して。一概にそれが間違っているわけではなくて、受け流すこと (飲み会の件など) もいいのではないか。

山淵：

色々なことが複合的に合わさって問題になってるのかなと思う。

松岡：

日本社会が直していくべきところと、外国人が流してもいいというところを分けて議論すべき。

安里：

雇用契約によるところがある。場合によっては小さなことが人種差別と判断されることがある。

中原：

制度的な問題と、社会的な問題。

安里：

子ども達は何かが受け皿になってくれるケースが多いが、深刻な問題はお母さんたち。母親に対する選択肢をもっと増やしていくべきだと思う。ドイツの職前訓練学校は、学費タダに加え、通うだけでお金がもらえる。外国人を含めた全員むけ。母親が貧しいことが子どもに悪循環を生んでいる。

松岡：

日本でも同じようなことが言える。

中原：

外国人だからなのか、貧困層だからなのかの区別が難しいけど大切。

今の日本にはわざわざ働きに来るメリットがないから、移民政策拡大する意味もなくなってきている。

安里：

女性に関してはメリットは作られているのではないか。

中原：

E君はお父さんに会える可能性を信じている。お母さんも会えることを期待している。もし自分だったら、相当ショックだが、彼にとってはアイデンティティ的にもひとつの希望なんだな。

安里：

みんなコンプリートっていう。

マサミもお父さんに会ってからおしゃべりになったし、家族統合が善、という考えはあるだろうね。

本間：

家族って言っても血の繋がっている家族だけでなく、血の繋がってない父など多様な家族の形態を認めて行こうという動きがある。日本もそれは同じ。

安里：

金城さん初めての海外はどうでしたか。

金城：

すべてが自分にとって新しくて、いい経験になったなと思うが大変だったな、と。

中原：

E君はお父さんに会える可能性を信じている。お母さんも会えることを期待している。もし自分だったら、相当ショックだが、彼にとってはアイデンティティ的にもひとつの希望なんだな。



(写真：安くて甘くておいしいフルーツ)

帰国日：2019年9月1日(日) 【執筆者：本間桃里】

お世話になった安里先生に、みんなで動画でメッセージを作った。そして早朝、半分寝ぼけながらタクシーに乗って空港へ。朝早いからか、車の渋滞はなくスムーズだった。空港に到着すると、研修中に起こった面白いことをなぜか色々と思いだして笑いが止まらなくなってしまった。(たとえば、ホセ・リサールの公園で私が「去年はゲジゲジみたいな虫がたくさんいたのに今年はいない」と言ったことに対して安里先生が「今年はアポイントメント取ってないからな～」と言ったことなど。) 出国審査のときにも笑いが抑えられなくて、出国審査官の方に“Why are you laughing?”と聞かれ、内心「怒られるかも…」とドキドキしながら説明すると、楽しそうでよかった！と笑顔で送り出してくれた。とても優しかった。

1週間はあっという間で、去年よりもフィリピンを去るのが名残惜しかった。必ずまた来ることを心に誓って、飛行機へと乗った。機内にはこれから日本へとわたるフィリピンの女性も多くいて、彼女たちが今どのような気持ちでいるのか、改めて考えさせられた。

フィリピン研修を振り返って

【文学部メディア文化学専修4年 飯塚彩】

主にフィリピンにルーツを持つ児童・生徒に対する学習支援と、その母親(結婚移民)を含めた社会統合に関する理解を深める授業の一環として、一週間フィリピンに滞在した。フィリピン政府在外フィリピン人委員会(CFO)に研修プログラムを用意していただき、その内外において、政府機関、NGO、教育機関、その他施設や観光名所などで見学とインタビューを行った。

私は、今回学びたいこととして、1. そもそもなぜ海外(日本)なのか、2. 渡航・移住に際してどのような問題やギャップ起こるのか、そして 3. 今の山積みの問題は「個々に対応していくべき問題」と「社会から変えていくべき問題」との間にどう線引きをするべきか、という主に 3 点を意識してこの研修に臨んだ。

1に関しては想像していた通り、日本人男性との恋愛と、金銭的な事情(その中でも日本を選ぶ理由は文化面での親和性など)が主な理由であった。しかし、フィリピンが国を挙げて国民の海外での労働とフィリピンへの送金を促進していることが、日本(日本であればそれは「労働力の流出」と呼ばれるであろう)に住む私にとっては衝撃的だった。

また、今回の研修を通して最もリアルで内面的な事情を知ることができたと感じるのが、2に関することである。JFC の経済的自立や日本への渡航をバックアップする団体である BATIS Center や DAWN を訪問したり、CFOでの移民手続きを完了し渡航をひかえた結婚移民の方々のお話を聞いたりする中で、彼らが抱えている(あるいは抱えるであろう)問題は、簡単に本人や周りの人々が「何が正しく何が正しくないか」をジャッジすることのできない難しさを含んでいることを思い知らされた。中でも最も印象に残ったのは、BATIS Centerで伺った話である。父親と離れ離れになった在フィリピン JFC 達にとって、日本の父親となんとか対面するということがそのものが

“fulfilling their identities”、つまり自己実現のための手段である場合があるという。しかしその一方で、実質的に自分と母親を捨てた存在である父親を許せず、憎み続ける子ども達も存在するという。私達京都大学の学生は皆後者に共感していたが、念願の父親との対面を果たし涙する JFC、そしてその上でも「自分の子どもだと認めることは出来ない」と様々な事情から拒否されてしまうケース等を知り、理不尽で、簡単に救うことの出来ない彼らの境遇をどうして行けば良いか分からず苦しくなった。また、日本に働きに出たけれど日本の職場の慣習に馴染めず苦勞をしたフィリピンの人々や、現段階で言葉がほとんど通じないことを気に留めず日本人男性との日本での夫婦生活に胸を膨らませる女性等に対しても、どのようなアドバイスを渡すべきか、あるいは何も言わないことが吉なのかということで研修全体を通して悩み続けた。

そして、3に関して、私がこの研修およびこれまでの学習支援活動を通して「社会から変えていくべき問題」として唯一はっきりと認識したことが、語学力の問題である。日本で生活する上で日本語能力があらゆるものの障壁になっていること、何かしらの受け皿がある子ども達よりもその母親達や労働者達の方が深刻であり根本的な解決策が必要であること、等の意見が先生と学生との間で出た。しかし、語学支援は社会の問題で

あるということ以外、私は3に関して他の線引きを見つけることは出来なかった。前述の通り、簡単に周りの人が「正しいこと」をジャッジすることは出来ず、個人と周りの環境に委ねた方が良いことが私の想像以上に存在していたからである。私は日系人や技能実習生を工場に多く抱えるメーカーへの就職が決まっており、その会社から今の問題を変えていくことは出来ないだろうかと思い、このような議題に興味を持っていたが、今後もこの分野の知識に敏感であり続け、様々な角度から考えていきたいと改めて感じた。

研修を通して身をもって知った問題はこれら3点には収まらず、フィリピンの貧困の問題、自動車台数が急激に増えて破綻した交通ルールの問題、歴史上の出来事(マニラ市街戦など)に対する加害者と被害者の意識の差の問題等、初めて知ること・初めて考えることが多くあった。また、「フィリピン人は明るい」というイメージを持たれる彼らはただ「明るい」のではなく、「初めて会う人にも興味を持って接する」というとても素敵な人間性を持っているのだと知った。フィリピンに関する社会問題を「どうにかしたい」と率直に感じたこと、しかし彼らの人柄が私達の時間を楽しいものにしてくれたということ、そしてそのようなことをメンバーで気持ちを共有しあいたくさん話したこと忘れず移民問題について考え続けていきたいし、折に触れこの経験を様々な人に話していきたいと思った。



【文学部社会学専修4年 今岡哲哉】

1. 学習成果

フィリピン研修では、フィリピンから日本に移住する人々と、その関係者・支援団体を集中的に訪問した。具体的には、フィリピン政府在外フィリピン人委員会、日本語学校、JFC (Japanese-Filipino Children) の母子支援団体などである。

本研修で得た最大の成果は、これまで主に京都にいる JFC への学習支援を通じて触れてきた日比間の国際移動現象を、フィリピンに行くことでより多面的に把握できるようになったことである。つまり、これから結婚して実際に日本に移住するフィリピン人女性やフィリピンに帰国した母子などへのインタビュー、あるいは移民送出プロセスに関わる日本人学校・フィリピン政府在外委員会への訪問を通じて、日本とフィリピンの間の移住をより包括的に把握することができたということである。

私に一番強い印象を残したのは、日本人と結婚して移住するフィリピン人女性たちとの面会だった。インタビューした方々に共通して見受けられたのは、英語やタガログ語を中心に話すフィリピン人女性と、日本語しか話せない場合の多い日本人男性との間では、十分な意思疎通できる言語が存在しないことである。それにも関わらず、女性たちは「幸せ」や「愛」を迷いなく口にするが多かった。彼女たちが出会ったばかりの私に必ずしも本心を打ち明けられるわけではないのは当然だとしても、この体験は私を思考の迷路に誘った。お互いを伝える言語が介在しない人間関係に、幸福や恋愛は存在するのだろうか? もちろん、言葉が通じたところで人間が分かり合えるわけではないのは、言うまでもないのだが。

2. 海外での経験

私は高校生の頃にアメリカへ交換留学した経験がある。他にも大学入学後に香港やフランスに語学留学している。近年は中国に関心を持ち、一年に三、四回の頻度で渡航している。しかし、今回のフィリピン研修が初めての東南アジア渡航だった。外は蒸し暑く、中は冷房のため冬のように冷えているフィリピンで、病弱な私はすっかり体調を崩してしまった。帰国後も風邪がなかなか治らなかった。

3. プログラム

プログラムの概要は1「学習成果」の冒頭で述べた通りである。付け加えることがあるとすれば、マニラの主要な観光地であるマラカニアン宮殿やイントラムロスに訪問したことである。

4. 進路への影響

私はもともと確たる進路に向かって生きているので、この研修が進路に決定的な影響を及ぼしたとはいえない。しかし、この研修を通じて、私は自分の進路への決意をさらに強固なものにできたといえる。私は大学院に進み、将来は移民に携わる仕事をしたいと考えている。安里先生がフィリピンで歴大なネットワークを築き、様々な人々から信頼を勝ち得ている姿を見て、私もいつかはかくありたいと感じた。

“The Age of Migration”という移民研究で著名な本に、次のような一節がある。”As a key dynamic within globalization, migration is an intrinsic part of broader economic and social change, and is contributing to a fundamental transformation of the international political order.”
これから日本とフィリピンの間の移住現象がどのように変わってゆくか、あるいは日本とフィリピンをどのように変えてゆくかを、私は見届けてゆきたい。



【文学部社会学専修3年 金城琴音】

私は今回のフィリピン研修に参加して、今まで自分が持っていた価値観や視野が非常に狭かったということに気がついた。「日本はとても恵まれている国だよ」とかつて日本でエンターテイナーとして働いていたフィリピン女性に言われた言葉を、私は今回の研修に参加するまで本当の意味では理解していなかったように思う。あまりにも低い給料や日本人男性と偽装結婚するフィリピン女性たち、学校に通わない子どもたち、街を歩いていけばたくさん出会う物乞いの人たちなど、日本では見ない光景や環境が、フィリピンでは当たり前のように存在していた。もしも私が旅行でフィリピンに来ていたとしたら、これらの現状を知っても「可哀想」と思うだけで終わりだったかもしれない。しかし今回の研修では、CFOやPOEA、Batisなど、今の状況をなんとか良くしようと取り組んでいる機関を訪れることができた。さらに日本大使館やOFWで働く方など、日本人としてフィリピンを支える人たちにもたくさんのお話を伺うことができた。私はこれまでフィリピンをどこか日本とは全く違う発展途上国のように思っていたが、貧富の差、教育の機会の差など、フィリピンと日本が同じような問題を抱えていたり、フィリピンと日本の間の関係にも問題があったりすることに気がつき、フィリピンで起きている問題は全く自分にとって他人事ではないと感じた。さらに、フィリピン研修を通して今まで当たり前、常識だと思っていたことや、考えたこともなかったようなことに対して疑問を持つようになった。例えば「人はなぜ結婚するのだろうか」「愛とは何だろうか」「どうして私たちは当たり前のように学校に行くのだろうか」「貧困がなくなるのは何故だろうか」などの問いに対して、本当に幅広く深く、自分の中で考えるようになった。これは、今回研修に参加して自分が最も変化した部分ではないかと考えている。この思考を通して、冒頭で述べたように、自分が持っていた価値観・視野の狭さを実感し、もっと色々な社会について勉強しようと思えたことは、自分の大きな成長になった。今回の研修で最も印象に残ったのは、日本で働くフィリピン人女性やJFCの支援を行うBatisというNGOでの話である。フィリピン人の母と日本人の父を持つ、日本でホワイトカラーの職に勤める女性が日本で働くことに伴う困難さについて語ってくれた。その話の中には日本の文化になかなか適応できない辛さ、言語の壁、「外国人」で「女性」であることから受ける差別など、聞いていて胸が痛むようなものも多かった。もちろん働いている場所は日本であり、日本企業側が全てを彼女たちに合わせるということは不可能に近いかもしれないが、制度改革や私たちの意識変革によってかなり改善できるだろうという部分も多く感じた。さらに、「フィリピンから日本に渡ってきて、日本の空港に降りたとき、(父親が日本人であることから)ここは私の国でもあるんだと思ってとても感動した」と涙を流して語った彼女の気持ちを踏みにじるのはとても悲しいことであると感じた。グローバル化や外国人労働者の増加が進んでいくこれからの日本で、違う国籍の人たちと働くということがどういうことなのかを、私も含め日本全体で考えていく必要があるのではないかと感じた。また、今回の研修で、自分の英語力不足によりうまく現地の人とコミュニケーションを取れないということが何度もあり、非常に悔しい思いをした。しかしそれと同時に、うまくコミュニケーションが取れなくても、積極的に話しかけ、対話しようとする姿勢が大事であることにも気がついた。これはどこの国を訪れても同じことであるが、ずっと日本で、日本人としか会話をして

こなかった自分にとっては非常に難しいことでもあった。しかし、現地の人と直接対話をするには、その国の文化や人々に直に触れられる貴重な経験であることを研修を通して実感したため、これから海外を訪れる際には特に意識したいと思った。今回の研修は、間違いなく自分のこれからの進路にも影響を与えたと感じる。今までは特にやりたい仕事や就きたい職業がなかったが、国籍も価値観も違う人たちとコミュニケーションを取ることに伴う気づきや学びの多さからグローバルな企業に魅力を感じるようになったし、社会の大きな問題を解決することに関わる仕事をしたいとも思うようになった。それに向けての勉強も、今すでに始めている段階である。この経験を「良い経験」として終わらせるのではなく、私の人生の大切な出来事として刻み、これからの生活に活かしていけるよう精一杯努めたい。最後に、安里准教授やフィリピン政府の職員の方々、推進室の方々、一緒に研修に参加した先輩方、この研修に関わってくださった全ての方々に、心より感謝申し上げます。



【文学研究科社会学専修 修士1年 中原慧】

フィリピンへの渡航前には結婚移民として日本に渡ってくる人に関する印象を具体的に持つことは出来ていなかった。情報として困難を抱えているということは理解しており、言語面での困難が大きいということも知っていた。実際に、CFO(Commission of Filipino Overseas)において、結婚移民として日本に渡航予定の女性と話す中で、どの程度の言語能力で、またどのように日本人男性と関係性を構築しているのか、ということを実際に話として、私の感覚として知ることができた。

言語面では、日本にあと少しで渡航するとは思えないほど日本語の運用能力は低かった。代替的なものとして、英語でのコミュニケーションを試みたが、日本語と同様に円滑なコミュニケーションを行える程度の能力はなかった。確かに、このような言語的な能力の状況で日本に渡航すれば、様々な困難が生じることは想像に難くない。日常生活はもとより、仮に就労を希望する場合にも日本語の能力不足により断られることも往々にしてであると推測される。

また、日本人男性とのコミュニケーションや関係性の構築についても想像とは異なる状況であった。CFO 職員からのセミナーでもあった、SNS やインターネットを介した出会いというものが一般化していた。日本では、職場や学校など、対面での出会いからの婚姻が多いが、国際結婚においては、日本人が関係する場合でも、大きく異なる状況が存在することを痛感した。加えて、日本語や英語も覚束ないフィリピン人女性とタガログ語も話せない日本人男性がどのようにコミュニケーションをとるのかという点は、私にとって大きな疑問であった。一人の事例では、Google の翻訳機能を使用していた。近代的な方法と言えはいいが、現実的には家庭での生活を営む上では問題もある方法であろう。

以上のように、実際に結婚移民の女性と話をすることで、なぜ日本に来ることが困難を伴うものであるか、ということの一端を知ることができた。また、CFO 職員によるセミナーでは、国際結婚が一種の人身売買となっており、それには SNS を含むインターネットの存在があるとのことであった。一方で、家族や親せきを通じた事例も多く報告されており、現実的には家計を助けるために自己犠牲を行う女性という側面もあると知った。国際結婚を考える際には、日本における困難はもちろん、なぜ日本に来たのか、どのように来たのかということも重要な領域であると感じた。

国際結婚以外では、DAWN や BATIS といった NPO への訪問では、かつて日本で働いていたフィリピン人女性や日本人とフィリピン人女性との間に生まれた子どもたちと話すことができた。まず、かつて日本で働いていた女性たちに関しては、明るい印象を与える人が多かった。また、日本での出来事や体験をざっくばらんに話してくれることも印象的であった。私の想像では、日本での経験は思い出したくないような部類のものと思っていた。しかし、彼女たちは、「あなたと同じ苗字の客がいたよ」やその客との間での出来事を教えてもらった。どのように彼女たちが日本での出来事を捉えているのかという点がより気になった。

JFC (Japanese-Filipino-Children) と呼ばれる、現地では「ジャピーノ」と呼ばれる、子どもたちとの交流では、NHK で取材されていた子どもにも会うことができた。番組内では、再度の日本への渡航についての希望を明確には示していなかったが、彼自身は再度

渡日し、父親との面会を希望している。また、彼の母親とも話すことができ、彼女も父親が彼への愛情を持っているはずと述べていた。アイデンティティを確立する必要がある JFC にとって、父親の存在は、「普通」の子どもとは異なるものであることが分かった。また、彼らの多くが、父親からの愛情を期待していることも大きな関心を寄せるものである。

以上のような経験から、今後国内外問わずフィールドワークをする際には、表面的な現象のみならず、当事者がその場に至るまでの経緯や背景を丹念に聞き取りを行えるよう努力していきたい。



2度目となる参加だったが、新たに学ぶことばかりで非常に意義深い1週間だった。全ては書ききれないため、特に考えさせられたことを2点書き留めておく。

第1に、制度の狭間にいる人々の生活と様々な権利をどのように保障していくかについてだ。例えば日本で働く留学生が挙げられる。フィリピン海外雇用庁(POEA)は、海外で働くフィリピン人労働者を守るため悪質な日本語学校等の摘発に前向きな姿勢を見せていたが、実際に摘発できているのは氷山の一角にすぎないと懸念していた。来日にかかった費用と学費の支払いに追われ、法律で定められた週28時間を超過して働かざるをえない留学生が多くいるが、留学生のアルバイトは厚労省の管轄にはならず、この問題を扱う所管が欠如している。また、元エンターテイナーのフィリピン人女性と日本人男性の間に生まれたジャパニーズ・フィリピーノ・チルドレン(JFC)も制度の狭間にいる。興行ビザが10代や20代の若い女性を対象にし、短期滞在という制約を課したことからもJFCの存在は「制度が作り出してきた」と言えるにも関わらず、正確な数の把握や、母親とJFCに対する積極的な権利擁護は政府主導で行われてこなかった。NGO団体DAWNには、父親に会えた子、会えたが複雑な気持ちの子、会えない子など、様々な状況に置かれた子どもたちがいた。以前京都に来てくれた子どもたちとの再会も果たし、こうして継続的に関わることで子どもたちの心境の変化を感じられた。DAWNの代表者からはJFCの問題が社会で風化していると危機感が語られたが、私は日本でJFCは常に見えづらい存在で、子どもたちの背景や普段感じていることを気に留める人は少ないと感じる。必要な支援に辿り着かない大勢のJFCがいることを踏まえて、今後も子どもたちと関わり続け、個々のストーリーを社会のものとして捉えられるような環境を作っていきたい。

第2に、日本で働き続ける困難さについてだ。日本で就労経験のある異なる人々から、母語が日本語でないことに女性であることが加わり職場で不利になった経験や、職場の人間関係の築き方が独特だとの意見をうかがった。一方トレーニングセンターでは日本での就労を目指して一生懸命日本語を勉強する技能実習生たちの様子を拝見した。日本に来て良かったと思ってもらえるのかを想像すると何とも言えない気持ちになった。労働者としてのみでなく、人間としてどのように受け入れ社会統合していくか、まだまだ課題が残る。

研修を通じて多様な立場の人々と繋がることができた。研究者を目指す者、そして一個人として、今後フィリピンコミュニティとどのように関わっていくかヒントを得ることができた。第二次世界大戦中マニラで日本軍が多くの市民を犠牲にしたお話をガイドさんから聞いたあと、気がついたら知らないフィリピンのおばあさんが私に微笑み肩を組んで歩いてくれていたことは忘れないだろう。私がタガログ語の単語を口にしたとき、新しくできた年の近い友達が「フィリピンの言葉を勉強してくれてありがとう」と嬉しそうに言ってくれたことも印象に残っている。フィリピンにいる間、山積みの問題や不

条理に辛い気持ちにもなったが、それ以上に温かい気持ちを受け取った。これをバネに、より一層研究や活動に力を注ぎたい。

謝辞

安里先生、国際交流推進室の職員のみなさまをはじめ、多くの方々のご尽力のおかげで無事に研修を終えることができました。この場をお借りして心より感謝申し上げます。



【文学部心理学専修4年 松岡萌映】

「JFC の子どもたちは日本に来て正解だったのだろうか」。春日丘中学校での半年間の学習支援ボランティアを通じて湧いてきたこの疑問について考えることが、私のフィリピン研修のテーマであった。フィリピン研修では、フィリピン政府機関や NGO など様々な立場から日本への移民に関わる人々を訪問した。Batis center という NGO を訪問したとき、日本のいわゆる大企業で働く JFC の女性に話を聞いた。彼女は日本の職場で起こる大小様々な出来事に違和感を覚えているようだった。その中には決定的に差別であるといえるような出来事もあった。例えば、彼女が上司に結婚を報告したとき、その上司は「子どもを産むならその前になにか成果を残さなければ昇進できなくなる」とプレッシャーをかけたという。今の日本の社会では、外国人であることや女性であることそのものが障害になりうるのだと痛感させられた。彼女が抱える問題は彼女や JFC だけの問題ではない。それは外国人労働者や移民だけの問題でもなく、日本の社会自体が抱えている問題だと思った。大学卒業後の進路について考えているいま、それは私自身にも大きく関わる事柄だった。私がボランティアを通じて疑問を持つようになったのも、JFC の子どもたちがこれから生きていく日本の社会は彼らにとって優しいものではないような気がしたからだった。しかし、問題を抱えているのは日本だけではない。たった 1 週間のフィリピン滞在の間にも、フィリピン社会にある重要な問題をいくつも目の当たりにした。特に、宗教上の理由が強いとはいえ、離婚も中絶も認められていない社会は女性が生きていくには不安すぎる。

研修を通して実感したことがもうひとつある。JFC の子どもたちには、フィリピンと日本、両方のアイデンティティが確かに存在しているということだ。Batis center で出会った人たちは「私たちの居場所は日本にもある。日本で働く権利がある」と言っていた。彼女らが日本を初めて訪れたとき、見知らぬ日本人から当然のように日本語で話しかけられたことで、彼女自身のなかに日本人としてのアイデンティティがあることを再認識して涙が出た、というエピソードが非常に印象に残っている。JFC の子どもたちが日本に来て正解だったのか、それは未だに分からないが、彼らは日本にいる権利がある。ならば、日本は彼らが自由に生きていけるような社会でなくてはならないと感じた。そしてその社会を必要としているのは JFC だけではない。研修中、参加者それぞれが感じたことを共有せずにはいられずに、ホテルの部屋で夜中まで議論をしたことが



あった。テーマは性、結婚、教育など多岐にわたった。フィリピンで感じたあの切実な危機感をこれからも忘れずにいたいと思う。

【文学研究科社会学専修 修士1年 山淵あいら】

本研修では、フィリピン政府在外フィリピン人委員会(Commission for Filipino Overseas: CFO)でのインターンをはじめ、その他政府機関や日本語学校、大学、NGOなどを訪問し、インタビューやディスカッションを行った。また、参加学生は各々の問題関心に基づいて、日本への結婚移民を対象とした5分程度の英語プレゼンテーションを作成し、計2回の発表を行った。

フィリピンは世界各国に労働力を送化する。かれらフィリピン人海外労働者(Overseas Filipino Workers: OFW)は稼いだ給料の多くを送金することで母国に残した家族の生活を、ひいては国家経済を支えている。国際結婚で海外に移住する結婚移民も多い。今回そういった移動を管理しているCFOや海外雇用庁を訪問し、OFWや結婚移民の保護やケアが非常に重要視されていることや、移住の審査や管理が高度に体系化されていることが分かった。一方で、かつて日本で就労したフィリピン人女性やその子どもであるJFCのエンパワーメントに取り組むNGOでは、在比日本大使館の当該課題に対する問題意識の希薄化が明らかになった。日本で就労するJFC女性や日本語訓練学校職員からは、日本の外国人労働者受け入れに関する諸問題や新在留資格「特定技能」の課題について聞き取ることができた。日比間の人々の移動に関する、日本社会が忘れてはならない事、今後新たにに取り組むべき事の両方への問題意識を深めることができた。

2017年に参加した初めてのフィリピン研修では、労働・結婚移民の実態に対してはもちろん、街中で目にするあらゆる事象に対して毎度かなりの衝撃や動揺を感じていた。2回目となる今回は、もう少し冷静な姿勢で参加することができたと思う。しかし日比国際結婚の有り様に対する依然として言語化しきれない感情が変わらず存在するし、ストリートチルドレンに触れられたときに自然と込上げてくる良くない感情に自己嫌悪感で苦しくなった。未だ消化しきれない程の多くの学びを得た充実感も感じている。こういった感情を、今後の研究へのモチベーションとして繋げていきたいと思う。



1週間で約15か所を訪問し、各々が10名以上に聞き取りを行った今回の研修は心身ともにハードなものであった。しかし、研修を終えた私達7名が共有しているのは疲労感というよりはむしろ、根深い社会問題に対して私たちはいったい何ができるだろうかという無力感や、これまで当然視していた「愛」や「結婚」の概念がいとも簡単に崩されたことへの焦燥感かもしれない。私達は研修期間中、各所で得た疑問についてその何倍もの時間をかけて思考し、時には夜遅くまで膝を突き合わせて話し合った。その時間も含め、研修期間の1週間すべてが充実していたと感じている。

貴重な学びの機会を与えてくれた本研修において、日程調整や引率をしてくださった安里先生をはじめ、国際交流推進室の職員の皆様やフィリピン諸機関の皆様には深く感謝いたします。特に安里先生には研

究/研究者とは何かということ、現地の人々と接する先生の姿から学ばせていただきました。本当にありがとうございました。



(写真：安里先生)



(写真：受け入れてくださったCFO職員さんたちと)

編集後記

在留外国人統計によると、全国の在留外国人総数は年々増加傾向にあり、2019年6月には過去最高の282.9万人に達した(法務省 2019a)。フィリピン国籍の保有者は27.7万人で、そのうち「永住者」が13.1万人(47.2%)、「定住者」が5.3万人(19.1%)、「技能実習」が3.3万人(12.1%)だ(法務省 2019b)。女性が70.0%を占め、特に40代後半から50代前半が多いのが特徴的だ。

こうした数字のみを知っていてもあまりぴんとこない。しかし、私たちはこれまで学習ボランティアやフィールドワーク、このフィリピン研修を通じて、実際に多くの移民と関わってきた。関わるなかで、この数字のなかには生身の人間の人生があることを、当たり前のことながら実感させられた。統計に表れない人々もいるため、現実はより多くの移住にまつわるナラティブがあるだろう。そして、移民政策が人々の国家間の移動と様々な選択(滞在期間・就ける職業・受けられる教育や福祉的サービスなど)を規定することを学んだ。結婚移民の女性の多くが年上の日本人男性と結婚すること、ジャパニーズ・フィリピン・チルドレン(JFC)がアイデンティティに悩むこと、技能実習生やEPA候補者が「家族のために」と日本語を一生懸命学習すること…。個人があたかも「主体的」に何かを選択したり考えたりするとき、その選択は制度と切り離せない。さらにその制度と密接な関係にあるのが、資本主義経済下にある「移民送り出し国」と「移民受け入れ国」の経済格差やポストコロニアリズム、「移住の女性化(feminization of migration)」(安里 2016:273)で見られるような「ケア」を担う女性というジェンダー規範などだといえる。マニラ市街戦の認識にフィリピンと日本で温度差があることや、フィリピンに住む若者が日本についてよく知っている一方で、日本に住む若者がフィリピンについて無知であることも、フィリピンと日本の非対称的な力関係とつながっていると考える。

同時に、たとえば結婚移民の女性や技能実習生たちを制度に規定された存在としてのみ捉えるのは私にとって違和感があった。冒頭で述べたように、今回の研修で、ひとまとめにはできないような、多様な個々人の豊かな経験を聞き取ることができた。研修メンバーの多くが印象的だったと語ったアオイさんの話を挙げると、彼女は日本の職場で理不尽な経験をしてきたが、Batisで築いた社会関係資本を駆使して自らをエンパワーしようと奮闘していた。パブで働く女性たちは、指名してもらえるように工夫し、男性客からのセクハラを回避する術を身につけていた。政府が懸念する偽装結婚も、彼女たちにとっては制度を利用した人生の戦略の一つである。決して既存の搾取的な制度や不平等な社会構造を容認するのではない。制度に意識的かつ批判的になったうえで、人々の移動と生き方をみていきたいと感じた。

また、研修では移民だけではなく、政府機関(CFOとPOEA)や大使館の方からもお話を伺うことができた。実はCFOの職員は、10月に1週間ほど来日し、大阪・京都・東京でフィリピンから来た移民の方々へ向けて講演やワークショップをおこなった。私もアテンドとしてそれらに同行させていただいた。そのときに感じたのは、来日前だけではなく来日後も継続してフォローアップしていくことの困難さと重要性である。長期滞在する人々は渡航前に必ずCFOでオリエンテーションを受講することが義務になっている。しかし、来日前と来日後で移民が抱える問題は変わってくる。CFOの職員は渡航前のオ

リエンテーションが来日後に抱える問題とどの程度整合性があるのかを気にしていた。たとえば日本でのワークショップで挙げられた多くの問題は離婚・再婚に関わる法律や子どもの教育についてだった。渡航前オリエンテーションではそれらの最新の具体的な情報がカバーできていない。また結婚移民の場合、CFOがいくら偽装結婚を疑っても書類が揃えば結婚を止める権限は持たない。女性たちが来日後にどのような生活を送っているのか現状を把握しづらいことも懸念していた。CFOが彼女たちが抱える問題を把握したいと考えても、彼女たちからわざわざ苦難を政府機関に告白することは難しい。そしてなにより、フィリピン政府が移民の人権擁護に熱心に努めているのに対して、日本政府は現状把握や対策に積極的に動いていない。パブで働く女性、結婚移民、JFCが直面する様々な課題は政策が招いた結果にも関わらず、恋愛や結婚・離婚を含む課題は「個人的なもの」だとして日本政府は真摯に向き合おうとしない。フィリピンのように移民を管轄する機関さえない。フィリピンと日本政府間で対等な議論ができておらず、移民の権利について合意がとれていないところにも問題があると考える。

来日後の移民の生活を把握することでいえば、研修に参加したメンバーは日本に住むJFCやその母親たちと日々関わりを持っている。学生という立場だからこそ把握できることが多くあり、それらをこのような研修を通じてフィリピン政府側と共有できることは意義があると感じる。日本の状況も移民が抱える問題も時間とともに変化するため、常にアップデートしていく必要がある。私たちにとっても、フィリピンや移民の来日前のプロセスを学ぶことは、子どもたちや母親との関わり方、日本の移民政策を考える上で貴重である。研修メンバーはそれぞれ多様な道に進むが、この研修で得た知見や経験はなにかしらのかたちで活かせるにちがいない。

最後に、この本報告書は、研修中に各自がとったメモをもとに作成したものである。その日見たこと・聞いたこと・考えたことを忘れないうちに記録した。編集作業をしながら読み返すと、誰かが重要だと感じ記録したことを私は記録していなかったりして、異なる視点から新しい発見があった。メンバーが改めてこの報告書を開けると、過去の自分とちがったことを感じるかもしれない。研修自体は1週間という短い期間であるが、それで終わりではなく、こうした長いスパンを含めて学びだといえる。

改めて、研修を無事に終えられたのは、安里先生、ご尽力くださったみなさま、フィリピンで出会った多くの方々のおかげです。メンバーを代表して、これをお礼の言葉に変えさせていただきます。

本間桃里

参考資料

安里和晃, 2016, 「移民レジームが提起する問題：アジア諸国における家事労働者と結婚移民」『季刊社会保障』 pp.270-286.

法務省, 2019a, 「在留外国人統計(旧登録外国人統計): 国籍・地域別 在留資格(在留目的)別 在留外国人」(最終アクセス日 2019年12月30日).

———, 2019b, 「在留外国人統計(旧登録外国人統計): 都道府県別 在留資格別 在留外国人(その4 フィリピン)」(最終アクセス日 2019年12月31日)

京都大学アジア研究教育ユニット (KUASU)
フィリピン大学・フィリピン政府派遣実施報告書 (2019 年度)

2020 年 3 月 発行

編集 安里和晃, 本間桃里
発行 京都大学アジア研究教育ユニット (KUASU)
住所 〒606-8501 京都市左京区吉田本町
電話番号 075-753-2780